

悪タイプだらけのポケモン

ボウシ=サン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

むかーしむかし、えつ？違う？

コホン

あるところに頭のネジが数本飛んだトレーナーが居ました
彼はカロスからホウエンに引っ越しすることと為りました。
そんな彼には大事なファミリーがいます

これはそんな彼らのドンチヤン騒ぎのお話…

目 次

キャラ紹介

アルファサファイア編（1クール目）

君の名前はあおだんご

なんでウシオさんガチホモなん？

当て身投げ連打のトラウマ

やめろー！こんなバトルじゃない！俺の信じるバト（ry

15

汚い（確信）

彼ははにわではない（無言の腹パン）

許されないんDA！

実際のプレイでヤミラミ使つたら泥試合になつたでござる

ホウショウエムウ！

筋肉MAX大変身！最大級のパワフルボイ！

ざわざわなんちやらのなんこちゃん

ツンデレじやねえ！意地つぱりだ！

でもノクタスつて不意打ち読まれやすいんだよね

アルファサファイア編（2クール目）

なんかもうアオギリさん出てくるビジョンねえわ

荒海の決戦

根源と悪の激突

予告でアクア団：あつ（察し）ふーん

この作品の次回予告に期待するなつてハツキリわかんだね

剛腕インパクト

エピローグ

そう言えばソライシ博士とか隕石ガン無視してたわ

悲壯の翡翠

S I D E N 死す

親方！空からキュウリが！

明日を掴むもの

悪だらクロニクル

ようこそ！喫茶ボウシ屋へ！

エピソードカロス I 始まりの日

114 111

106 100

96 90

87 82

77

キャラ紹介

登場人物について触れていきます。
更新に合わせて内容が変化していきます。

ボウシ（人間）

カロス生まれのポケモントレーナー

S A N 値が圧倒的に少ないのか奇妙な言動が多い。
（。▽。）基本的にこんな顔をしている。

S I D E N （ヤミラミ）♂

ボウシが始めて手にしたポケモン
相棒からの扱いが雑だが本人の言動もボウシに似てはいるが基本
的にツッコミ担当。

幸運E

技

シャドーボール

瞑想

自己再生

マジカルシャイン

ザルトヘル（ドラピオン）♂

カロスを旅していた時にボウシに捕獲された。

過去にシンオウリーグを突破しておりおやこドンの父とは戦友
だつたらしい。

頼れる兄貴分

技

辻斬り

クロスボイズン

アイアンテール

剣の舞

おやこドン（ヤミカラス）♀

ザルトヘルに父の訃報を告げに来たらボウシに捕まつた挙げ句不名誉な名前をつけられたのであまりなついていない。

口より先に嘴が出るらしく、遺伝ブレイブバードをしようとやってくる。

技

ブレイブバード

鋼の翼

メロメロ

電磁波

あおだんご（ミズゴロウ）♂

オダマキによつてボウシに渡されたホウエンの御三家ポケモン前向きでツツコミ担当なのだが…？

技

水鉄砲

体当たり

泥かけ

鳴き声

カルロ（カラマネロ）♀

カルロスにてボウシと旅をしていたポケモン、現在訳あつて離脱している。

技

馬鹿力

サイコカッター

辻斬り

リフレクター

ミドラ（ドラミドロ）♂

カロスにてボウシと旅をしていたポケモン、現在訳あつて離脱している。

技

ベノムショック

どくびし

流星群

熱湯

オダマキ博士

ホウエンの博士、たしぶオウシ達からまともに名前を覚えられない。

ハルカ

オダマキの娘、ボウシをライバルとして見ているけどそもそもボウシはまともに記憶していない。

ジユプトル♂

ハルカの相棒、彼女に対して大変過保護

ぞんざいに扱うボウシを八つ裂きにしたいと思っている。

ミツル君

ボウシに憧れる純粋な少年、ここでは廢人にはならない。

ラルトス♂

ミツル君の相棒、無口。

ボウシパパ

ジムの入口に立っているあの人、ボウシに捕まえたヤミラミを送りつけた人。

S I D E N 「因みに技の所にあるのはバトルで使つてくやつだから演出の都合でリスト外の技も使うぜ！」

あおだんご「まあ、作者がどのタイミングでどの技覚えるかとかでやらかすだろーけどなあ。」

おやこドン「そしたら奴の腹にブレイブバードを叩き込むだけよ

ザルトヘル「出番マダーヴー？」

アルファサファイア編（1クール目）

君の名前はあおだんご

「着いたぞー！ フウーハハハハ！ オーロロロロロロロロロロロロ（嘔吐）」「何初手でゲロ吐いてるんすか!?」

ミシロタウンのある家の前、一台のトラックが停車し、荷台から帽子を被つた少年とヤミラミが降り：叫ぶやいなや酔いから嘔吐しだした。

「たくつ…荷台に乗せるとかマザーも鬼畜だぜ…オエツ」

この少年、やたらと本名を隠したがるが人からはボウシと呼ばれ、それを愛称にしている。

「しかも段ボールの固定ガバガバだから何度落ちたのにぶつかつたか…」

そしてこの冴えない紫のポケモン、ヤミラミ。

ボウシからS I D E N と言う不名誉な名前を授けられたポケモンである。

「さーて、ついたし…パバーンにでも会いに行くか！」

「はえーよホセ」

ほぼ無断で町を飛び出すボウシすると…

「たつ！ 助けてくれえーーーー！」

スタスタ
スタスタ

「たつ！ 助けてくれーーーー！」

「どうする？」

「いや、助けるよ！ お前トレーナーやろ！」

めんどくせーとぼやきつつも声の方に向かうと…

「わんわんおがオッサンのケツを追いかけてました」

「誤解を招く発言はNG…てかれつて親父さんの知り合いとオオダ

ヌキだつたかじやね?」

「あー!あのクヌギダマ博士な!よつしゃ!助けてポケモンもろたろ!
！」グツ!

「なんでうちのトレーナーこんなクズいんだろ(遠い目)」

「そこの君!そこのボールからポケモン出して助けてくれ!」

「ふあーwwwいきなり知らねえポケモン使えとか普通に手持ち
使うわww」

突然表れ草を生やしたのにムカついたのかわんわんお…もといポ
チエナはボウシを標的に変えたようだった。

ポチエナのかみつく!

「先制攻撃でダイレクトアタックとかルールを守つて楽しく以下略」

「言つてる場合か!シャドーボール!」

S I D E Nのシャドーボール!

効果は今一つのようだ…

〔解散〕

「ちょーい!誉めろや!そこはせめて労えや!」

真面目にやる気があるのだろうか…オダマキは目の前の彼らを見
て頭が痛くなつた…。

「へいへい…そんじゃ行つちゃえ!姉御!」

ボウシはヤミカラスをくりだした!

「あらあ?かわいいワンちゃんねえ…」

ポチエナのかみつく!

ブチ

「あらあら…悪い子ねえ…」

「あー、ちょっと?そのヤミカラス止めた方が…」

「止めて止まるなら苦労しないのよ…」

「あつ(察し)」

おやこドン(ヤミカラス)のブレイブバード!

飛翔する黒き翼を見て オダマキは理解した、このヤミカラスはレ
ベルが高い。

そして…とんでもなく性質の悪いポケモンだと…

「きゅうく」

ポチエナはたおれた！

直撃したポチエナが数回バウンドし、地面に叩き付けられる、その目は閉じられ痙攣している。

「わんわんおが死んだ！」

「この人でなし！」

そしてこのトレーナーともう一体の手持ちである。

「殺してないし、あんたらを殺すわよ？」

「嘘です、さーせん」「

「君達なんなの…（困惑）」

「そうかそうか！君がセンリのジムのトレーナーの子供か！いやー、ぜんつぜん似てないねえ！」

「しばらくぞてめえ」

「事実なんだよなあ…」

あの後オダマキの研究所に戻り、礼とデイスリを受けていた。
「まあ…彼の息子だし助けられたの事実…そこで…この三四のうちの
一体を君に授けよう！」

「んじゃ青いので」

「こいつ絶対なみのりの為に選んだろ。」

「さーてど…S I D E N よ。」

「あーはいはい、俺の二の舞な。」

仕方無く帰宅し、S I D E N と部屋でだらける、これが彼の日課とも言える。

「何にするかね～まあご対面してからにするか」

そう言いモンスターボールを投げ、ポケモンを出す。

「あー…あなたが俺のトレーナー?」

出てきたのはホウエン御三家、ミズゴロウ

彼は目の前の人間に問いかけた。

「…………」

「ん?」

「お前の名前は……」

「お前の名前は…あおだんごだああああつ!!」

「ハア!?なにこいつ!なんのこいつ!」

「諦めんしやい、こいつの頭のネジ…欠品してるから」

「O T Z…なんだつてこんなのに……」

「俺はS I D E Nつてんだ…お前と同じ…あいつに名前を付けられた
ポケモンさ…」

「S I D E N:ひつでえ名前だな w w w w

「ファーウ ウてめえ w w」

「Z z z z z」

「「寝てんじやねえ!」

S I D E Nのシャドーボール!

あおだんごのみずでつぼう!

「お母さんに『う』とは?」

「「すいませんでした…引っ越し初日で部屋汚して…」「

これが…後にチャンピオンを下すポケモン、あおだんごとの出会い
である。

なんでウシオさんガチホモなん?

「オーロロロロロロロロ（毒キノコ食べた人）」

「まーた初手リバースか…」

「もうやだこのトレーナー」

現在、トウカの森を突き進むボウシ達。

肝心のボウシは毒キノコを拾い食いしたけどな!!

「はあーて言うか何日さ迷つてんすか…もう三日は歩いてまつせ?」

「獸道を進んでるからなー…草タイプとかばつかで俺には辛い」

「おやこドンの奴は「繭なんて潰しても楽しくない」って出てこねーし、あーめんどくさ。」

そんなこんなで愚痴りながら歩いていると舗装された道が見えてきた

「「出口だああああつ！」」

テレッーンテレレレ

「目があつたな！ポケモン勝 r y」

「ラリアットう！」バゴオ

短パン小僧を倒した！

「おい、ポケモン勝負しろよ」

「研究所帰りたい…。」

こうして彼らはカナズミシティにやつと思いで到達、翌日はゆっくり休むことにした…。

「全て壊すんだ！（窓ガラス突き破り）」

一日後、ボウシはカナズミジムに挑戦するため門を叩いた

「どう見ても突き破つておりません!?しかも窓ガラス！」

「イカれた挑戦者を紹介するぜ！俺！ 以上だ！」

「なんなんですかコイツ！」

突然の来訪者にただひたすらツツコミを入れる彼女。

カナズミジムのジムリーダー、ツヅジ。
くつこう系ジムリーダーである。

「何やら何者かに貶された気もしますが…良いでしよう！挑戦なら受けたちます！」

「いいだろう！ いざデュエル！」

「だからポケモンバトルしろよおおおつ!?」

ボールから飛び出てきて体当たりをボウシに当てるあおだんご。

「ルールは一対一、交代も無しですわ！ 行きなさいつ！ ノズバス！」

「貴様には鉄の意思も、鋼の強さも感じない…」

「なあだんご、あいつなに言つてんだ？」

「ええ…（呆れ）」

「とりあえず行つてこい！ あおだんごつ！」

「へいへい…まつたくやつてられ…」 ゴンツ！

・・・・・・・・・・・・・・

「岩石封じだドヤア」

「ふふふ…さあ！ ノズバス！ どんどん相手の素早さをお下げ…な」

「これはノズバスさんの謝罪案件なので？」

山積みにされた岩の中から出てきたのは二足歩行で立つあおだんご。

「うわあ…」

「ええ…」

「たつた！ だんごが立つた！」

「おいつ！ なんだその反応は!? 別にいいだろ！ どうせ進化したら立つんだしさ!!」

激おこなあおだんご、しかし顔は青いままなのである。

「…ハッ！ 別に二足歩行であろうと関係ありませんわ！ ノズバス！ 岩

石封じ！」

「よくもやりやがったこの野郎！ オラア！」

「ギヤアアアアオオオアツ!? 普通に馬乗りで殴つてくるうううつ!？」

「だんご…あいつもしかして中々の人材なんじゃ…。」

ボムツ

「人じゃねーけどな、にしても馬乗りで殴るとか…。」

「まあ、別にいいか」

このトレーナーにしてこの手持ちありである。

「いやあノズバスさんは強敵でしたね…」

「ジムリーダーさん後半泣いてたじやねーか！」

「お手て痛い」

(半ば強引に) バツジを手に入れたボウンシ達。
彼らの旅はまだ始まつたばかりだ！

?????
「出番まだかー?」

当て身投げ連打のトラウマ

「海だアアアアアアあつ!!」

「ハイハイ、船酔いでリバース……しないつ……だと!?」

船乗りを名乗るハギ老人に恩を売り、彼の船でムロを目指すボウシ達。

「あー、潮風落ち着くわー。」

「お前どう見ても淡水生物だろ!?」

旅立つてから数週間、S I D E Nとあおだんごは友と呼べる仲になつていた：

「あつ、さつきの生魚が当たつ……オツ！ オロ r y」

「もうやだこのトレーナー……」

「さーて！ 僕はジムに行つてくるからお前らはウイツシユさんに手紙渡してこい！」

「あーハイハイ、ダイゴさんね。」

「つーか、姉御だけでやんのかよ……まあ三タテしそうだけど。」

こうして彼らは別行動を始めた。

石の洞窟

「やくつと故郷に帰つてきたあ！」

「へつ？ S I D E Nつてこここの生まれなのか!?」

「ボウシの親父さんに物理的にゲットされてない、ボールに詰め込まれてあいつのところに郵送された」

「アイツの親父さんもクレイジーだなつ!? つーか親が親なら子も子じやねーか！」

「そこのポケモン達、少し静かにしてくれないかな?」

「ん?」「お?」

そこにいたのはスースを着た若い男が一人、壁画を見ていた。

「なあ、あれってダイゴつて人じやね？」
「どーだろうな、とりあえず声かけるか」

「ジム攻略の時間だオラア！」

「自動ドア蹴り開けてくる挑戦者とか初めてだよ…」

「ツヅジと違い落ち着いて返すこの男こそムロタウンのジムリー
ダー、トウキ。」

「挑戦なら受けたっさ、ルールは一対一！手持ちは二体だ！」

「あー、こいつノリ悪い類いだわー、まあいいや」

「さあ！行つてこいワンリキー！」

「いつたれおやこドン！」

ポンッ

「あ”あ？（半ギレ）」

「……なんか、凄い目付きの悪いヤミカラスだな」「なつき度なんてものは溝に捨ててるレベルだしな」

「…まあいい、ワンリキー！からでチョップだ！」

「やつたるで！」ベキイ

「…………殺すボソツ」

ドゴォオオオツ！

「はいはいブレバワンパン、ブレバワンパン」

「わっ！ワンリキー!?」

「やられたで…すまんニキー…ガクツ」

「まさかワンパンされるとはな…ならば本気で相手してやろう！い
けつ！」

カイリキー！

「

「わ た し で す」

「ハリテヤマは泣いていい。」

「すまんが発展場に居そうなガチムチはNG（撤退）」

「友人のゴーリキーを進化させてたんだよ…挑戦者来たならそつちを優先するしかないじゃないか…」

「エースを通信進化に使つてんじゃねーよ！ つーかアイツ逃げたし!!」

「態々ありがとうございます、これはお礼の技マシンだ受け取ってくれよ。」

「あざーす、んじやボウシのどこいくか」

「ボウシか……ついでに見てみるかな。」

「おいおい！まさかヤミカラスしか居ないとかやめてくれよ？」

「あー、へいきへいき、もう一体居るから。」

「なにがこようと俺の筋肉の敵ではない！キリツ」

「(こ)のカイリキーうぜえええっ！」じゃ！任せたぞザルトヘル!!

ボムツ

「あ”あ？（キレかけ）」

・・・・・・・・・・・・・・

「ホウエンついてから一切出さなかつたのは悪かつた、うんだから葉巻吸うのやめない？ 流石に怒られそう。」

「ハア…しゃあねえ。」

「あれは…確かドラピオンだつたか、珍しいな。」

「いいからとつと来いよオラ、格闘が悪に強いからつて舐めてるとしばくぞ。」

「ええ…トウキさん、こいつ完全にヤーサンですよお…」

「耐えろ！アイツは自分で悪タイプつて公言したんだ！殴れば勝てる！からてチョップだ！」

「うお！ソイヤツサ！」

ベシツ！

「…あー、言つてなかつたな…俺は毒と悪の複合だ。」

「そう言うことは早く言つてよんもおおおうん！」

「うるせえ！（どくづき）」

「まさかの腹パン！？」

「つじぎりしても効かんしね、しようがないね」

「クソツッ！こうなつたらクロスチョップだ！」

「痛いけど…喰らいなさい！怒りの一撃！」

攻撃は外れた！

「ふあーｗｗｗｗ隙だらけやんｗｗｗｗザルトヘル！ギガインパクト

!!

「その意見には賛成だ！食らいやがれ！」

「なんでジム倒壊してんの…」

「姉御がポケセンでサイコソーダ飲んでる時点でそんな気はしてたわ
…」

「カイリキーごと柱にぶつかるとか予想外すぎる…」

「だいぶハデにやつたな…まあ実行犯は俺だがよ。」

「よし、あいつに請求書送つとこう、んでバツジはよ。」

「「厚かましい！？」」

やめろー！こんなバトルじゃない！俺の信じるバ
ト（r y

「カイナ？そんなもん知らん」

「アクア団え…」

「だつてザルニキがダイレクトアタックで黙らせたしねしそうがな
い。」

そんな感じで今日も彼らは旅をしている。

カイナで不審者達をしばいたり、カラクリ親父と言う不審者の屋敷
を壊したり……

「不審者ばつかじやねえか」

「ヤーサンがそれ言う？」

ムロでの登場以降、ザルトヘルは自発的にボールから出てきてい
る。

「にしてもデケーなこの上の橋」

「サイクリングロードだつてさ、まーチヤリのねえ俺らには関係な
いっすよね」

パンフレット片手にSIDE Nが説明してると一人と二匹の前に
人が立ち塞がる。

「みつけたー！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

（。口。）？

「ザル知り合い？」

「いや、SIDE Nでめえは？」

「女の知り合いに人間は居ないっすね」

「「どちら様？」」

立ち塞がった少女……ハルカはその場で膝をつく。

「嘘……私の存在感……無さすぎ？」

「おい、なんかへこんでるぞ。」

「なんとかしてやれよー」

「えー：知らんもんこんな子ー」

「ハルカです！オダマキ博士の娘の!!」

「……えつ？あいつ既婚者なの!?」

「どんでもねえデイスリを入れやがったぞあいつ。」

「あーほら、泣きそう。」

「もー！怒りました！3 VS 3 のポケモンバトルです！嫌でも記憶に残してあげる！」

「あつ、はい」

「まずはこの子！行つて！ホエルコ」

「やつたるでえ！」

「ほーん、んじや青団子で」

「正氣かこいつ!?」

「相性関係なしに倒してあげる！ホエルコ、転がるよ！」

「ごろごろするでえ！」

「青団子、玉乗り」

「よつと」ヒヨイ

「こいつ！：俺を乗り物に：つ？」

「恐竜に玉乗り仕込みたいね（）」

「チャーラヘツチャラ r y（ホエルコが壁に叩きつけられる音）」

可哀想なホエルコは玉乗りされて壁に叩き付けられてしまつたん

D A ☆

「むむむ…そんな戯い方があるなんて…」

「ないんだよなあ」

「む…ならいつて！マグマッグ！」

「祖母はホグワーツで教師してます」

「マグカルゴナガル先生つ！マグカルゴナガル先生じゃないか！」

「誰だよ」

「ファーソウwwwコイツwwwwww」

「マグマツグもふざけない！ひのこ！」

「スチュー・ピフォイ！」

マグマツクのひのこ！

効果は今一つのようだ…

「さかさバトルならワンチャンあつたな…プレゼント→フォー・ユー！」

青団子の泥かけ！

効果は抜群だ！

「眼が！目がああアオアオおつ!?」ゴロゴロ

「これはひどい」

「やつたやつが言うなし、団子！とどめの水鉄砲だ！」

「カーッ（——）ペツ」

マグマツグは倒れた！

「マグマツツツツグ!? 酷い！この倒され方は酷い！」

「じょうがないね♂」

「こんなのにバトル挑むから…」

「S I D E N、飯抜きな」

「ふあ!?」

だんだんと霸氣の無くなつていくハルカだったが：

「それならこの子で三タテしてあげる！ジユプトル！」

「マスターを泣かせたのは誰だ！」

「あつ、緑のやつ」

「ザルー、あれつて恐竜さんかドン？」

「すまんが突然のデュエル要素はNG、蜥蜴だろ。」

ボウシ達の挑発！ ジユプトルはのつてしまつた！

「野郎！ぶつ殺してやる！」

ジユプトルのリーフブレード！

青団子が耐えられるわけないよなあ？

「タイプ相性には勝てなかつたよ…」

「青団子ー！は、まあいいや」

「解せぬ」

「フツ、所詮未進化では進化系の私に勝てまいキリツ」

「じゃ、ザルトヘル出すわ」

「そい（どくつきと言う名の腹パン）」「

「グフオ…不意打ちとは…卑怯なり…チーン」

「わっ私のポケモンがぜ、全滅めつ…」

「マインドクラッショウかな？」

「マイクラつて略すとクラフト出るよな」

「ふ…ふふ、でもこれで彼の記憶に私が刻まれ…」

既に居ないボウシ達。

そして通りすぎるゴクリン

「もうキンセツ行つちまつたぞ」

「…………チーン」

ハルカは目の前が真っ白になつた！

汚い（確信）

キンセツシティ ポケモンセンターハローワーク

「見たいよー、ゲームコーナーで有り金溶かす人の顔が見たいよー」「かあー、素直なトレーナーだなあ！見せてやりてえよ、ゲームコーナーで有り金溶かす顔をよお」

「あつ、S I D E Nが帰ってきた」

「（ゲームコーナーが消えていて有り金溶かせなかつた顔）」「無能」

「何故事前に調べてないのか」「そんなことよりお腹すいた」
相変わらずの一行である。

翌日

「すべて壊すんだ！（窓ガラスダイブ）」

「ハイボールテージ！（突然の超次元サッカー）」

「キーパー技に勝てなかつたよ…」

「なにやつてんだうちのトレーナーは…」

「ぶつちやけこの作品のネタつて読者に伝わつてるんですかねえ」

「つーか飯も食わないでジム戦とかバカなの…」

「賑やかなやつらじやのお：朝一から来るとはこのテツセンもその心意気に答えねばな！」

ジムリーダーのテツセンが勝負をしかけてきた！
テツセンはラクライを繰り出した

（へへ）「わんわんお！」

「またいぬか」

「ふあー、とりあえずS I D E N行つてこい」

「なんか困つたら俺出しどけ見たいな感じになつてません!?」
「氣のせい氣のせい、悪の波動発射！」

「あーもう、くらええい！」

「ラクライ！電撃波で迎え撃て！」

「オールハイルヴリタアニア!!」

「ふあ!?」

「デデーン！」

「相討ち…だと？」

「瞑想使わねえとこうなるのかあ」

「わんわんおには勝てなかつたよ…チーン」

「こうなつたら青団子！泥でも投げ付けてこい！」

「技直撃したら多分死ぬんですけど」

「そしたらザルトヘル出すから気にするな！」

「割りとブラックだコイツ!!」

「ふふ…ゆけえい！コイル」

ふよふよとボールから出るなりその場で高速で回転しだすコイル

「なんなんだこいつ!?」

「ガーハツハツこれぞコイルターンよ」

・・・・・・・・・・・・・・

「大 寒 波」

「禁止カードになつてろ！」

「あーもう今回めちゃめちゃだよ」

「隙ありペッ」

「あつ

「あつ

「あつ

「あつ

「四倍には勝てなかつたよ…」

「コイルウウウウツ!!」

「やつたぜ」

「助かる」

「新入りとトレーナーがブラックだ…」
「いつも平氣でやつてることだろうが」
テレレレン

「おつ…おつおつ！」

「進化とかはえーなホセ」

「むしろ遅いんじやねえか」

「そりやザルニキがワンパンしたりしてるからなあ…」

おめでとう青団子はスマクローに進化した！

「進化シーンを雑談で流される奴が居るらしい」

「ああ！それってハネクリボー？」

「お前も苦労してるのぉ…、それとこれとは別じやゆけえい！レアコ
イル！」

「コイル等と一緒にだと思うな！奴はキンセツにおいて最弱…ククク
よーし、青団子！マツドンショット！」

「ええ…嫌な予感が…ウプッ」

「あつ（察し）」

「あつ（察し）」

「あつ（察し）」

「あつ（察し）」が三体…来るぞ青団子！」

「オロロロロロロロロ」

青団子のマツドショット！

効果は抜群だ！

「ぎやあああああああ…目がっ！目がああああ…」

「ごろごろ」と悶えるレアコイルを見て追い討ちを指示するボウシで
あつた

「もう一発！マツドショット！」

「オロロロロロロ…」

ジムリーダーのテツゼンに勝利した！

「清掃代は後で請求するからな」

「サー…センw」

「やつたー！進化したぞー！」

「おう、なら今日は俺が飯おごってやんよ」

「流石ザルニキ！太っ腹すね！」

「せぬ…解せぬ」 フラフラ

「あつ三体のコイルを素材にしてるやつ」

「レアコイルだ！解せぬ…貴様のようなクソコラ素材に負けるなど解せぬ！」

・・・・・・・・

「クソ……コラ……？」

瞬間！青団子の脳裏に受け継がれていた記憶が目覚める！

スマクローケソコラグランプリ開幕！

スマクローケの透過素材

スマクローケBB

思い出してはいけない記憶を呼び起こしてしまった青団子は1D
100のSANチェックです。

「チーン」

「団子お!? 大変だ！団子が！団子の目が遠い！」

「なんでこっちが有り金溶かした顔みたいになつてんだよ」

「ざまあみたか！フハハハハ！」

「ほお…ちょっと兄ちゃんこっちこようか」

「ヤクザかの？」

「大体あつてる」

レアコイルガアガメンハジイ！アツー！デレツレーウジョウガン
ケン！

「なんなんじやあれは」

「たまにネタに走るヤーさんすね」

「(。。△。) ポカーン」
「青団子ー、駄目だやつば目が遠い…」

彼ははにわではない（無言の腹パン）

「アアアアアアアツツツ!!」↑砂嵐で目がやられてる人

「だからゴーグル買ってから行きましょうって言つたじやないすか！」

「せめて正面のを防げればなー」↑持ち物 黒い眼鏡

「ポケー」↑平氣

今日も元氣よくホウエンを旅するボウシ達、彼らはフエンタウンを無視して砂漠を行進していた。

「化石がほしいんじゃアアアアアつ！高値で売るんじゃあ！」

「言つてることが子悪党じやないですかやだー！」

「おい、いい感じの洞窟見付けたからそこに入ろうぜ」

「さりげなく団子の奴がもう入つてやがるけどどりあえず休憩じやい」

「うまま棒うめえ」ボリボリ

「なんか怒られそうな名前だけど携帯食料だから問題ないっすね！」

「そういうことじやねえんだろなあ‥」ボリボリ

洞窟に潜り混んでから二時間が経とうとしている。

砂嵐は酷くなる一方でもはや外の様子など伺えぬ程の激しさになつてている。

「つーか入口塞がねえと野生のポケモン乗り込んで来そうじやね？」

「おつ、そうだな」ボリボリ

「「ん?」」

聞きたれぬ声に振り向くとそこには‥：

「うまま棒うめえ w w w w」

うまま棒を盗み食いしてゐる野生のサボネアが現れた！

「具体的すぎるわ！」

「なんだこいつ!？」

「やつたれ青団子！」

「ポケー……わたしはしようきにもどつた！」

「3体1とかないわーｗｗｗｗ」

「必殺の！体当たり」

青団子の体当たり！

サボネアは華麗に避けた！

「当たらなければどうと言うことはないキリツ」

「はいはいアクションマジックアクションマジック」

「お前ごときが榊遊矢に勝てると思うな！」

「すまんがARC Vの話はNG」

「隙あり！」

「なんだこのサボテン!? 畜生！はにわ野郎ならワンパン出来るのに

！」

「避けろ団子！」

サボネアの二ードルアーム！

効果は抜群だ！

「彼は…はにわではない（無言の腹パン）」

青団子は倒れた…

「四倍には勝てなかつたよ…チーン」

「こいつ無双するかワンパンされてばっかじやね？」

「多分本人が一番分かつてると思うんだよなあ」

「ウエーイｗｗｗｗやつたぜ」

「今だやれ！S I D E N !!」

「マジカルシャインドーンっ！」

S I D E Nのマジカルシャイン！

サボネアは避けられず直撃した！

「チーン」

「やつたぜ」

「ついでに捕まえようスパボでいいか」

コロコロ…ポンポン…テレツレーレレレレ

サボネアが図鑑に登録…

「あつ…図鑑ねえわテヘペロ」

「あつ」

「あつ」

「ポケー」

「よし…コイツの名前はうまま棒だ！」
「誤魔化し下手かつ!!」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

許されないんD A！

ボーマンダに乗るボウシとシルヴァ博士（通りすがりのシルヴァ
ティ）

「なつ何をする!?」

「シルヴァ博士、あなたは悪用されたんだ！今のあなたはタイプ一致
大爆発芸人なんだ」

フエンジムにて……

「挑戦者来ないかなー…？ボーマンダがこの辺りに居るなんて珍しい
⋮」

「シルヴァ博士、お許しください！」

ゲシツ

「うおー」

蹴り落とされるシルヴァ博士と飛び去るボウシ

「んー？何か落ちてき……」

～シルヴァ博士死のテーマ～

「シルヴァ博士、無事フエンのジムバッジは手に入れましたよ…」

「あいつ（シルヴァティ）ただのトバつちりじゃね？」

「理不尽過ぎてワロタ」

「ポケー」

「そんなことよりお腹がすいたのだけれど」「

「駄菓子ならありますよ、姉さん」

(悪だらつ!)

「ふあーwww今年の映画ガオガエン出るやん、観ねえと」

「ポケモン映画…うつ、頭が」

「そいやテメエ、ポスターに居たのに出てこなくて変更版出たよな」

「うつそだろお前www」

「うるせえ!この10円御菓子野郎!」

「♀なんだよなあ…」

「ポケー」

「そいや姐御はどこいつたんすか?」

「ポケー……電話してくるつてよ」

「突然喋んなや(顔パン)」

「あーもう滅茶苦茶だよ」

「ええ…うん、お父さんの容態は…そう」

わざわざキンセツ経由で帰っているボウシ達。

おやこどんは電話ボックスで誰かと連絡しているようだが……。

「いえ、お嬢もご無事で…ザルトヘルの兄さんが一緒になら安心です
が」

「そうね、ザルは頼りになるわよ、他は…まあ盾にはなるかしらね」

「そうですかい…では、お嬢」

「ええ…また電話するわムウマージ」

「うま棒、どう見る?」

「あれは男だな、間違いないく」

コツソリと電話を盗み見る青団子とうまま棒。

おやこドンが電話ボックスから出るとそのまま隠れる。

「と言うか電話の内容はわからんかつたけどなんか真剣な顔してたなー」

「せなねー、自分はここに加わって間もないから姐さんのことよく知らないし。」

「あー、姐御は多分実家と電話してたんだと思うよー」

「S I D E N!？」

「ほつ!? いつの間に！」

「すり替えておいたのさ！（トリック）…じゃなくて、姐御の事だろ？」

ヨツコイシヨと言いながらベンチに座るS I D E N。

その両サイドに座る青団子とうまま棒。

「ほら、俺達前は力ロス旅してたつて言つただろ？」

「言つてたねー画面外で」

「……で、その途中でボウシが姐御捕まえてさ、姐御としてはすげえ不本意なんだけど。」

「あーだから一向になつかねえのか姐御」

「そうなんだよなあ、一応ザルの兄貴が知りあいだつたからなんとかなつたけど。」

「へえー……人の電話を盗み見したあげく勝手に過去を話すとはいひ度胸してるわね」

「「…ファ!?」」

「げきおこのおやこドンが現れた!!

「あつ、死んだ」

「ポケー」

「飛行に勝てるわけないだろ！」

「……ブレイブバード。」

カアーカアー

「おい、何してんだ三バカ」

「「」」チーン

粉碎されたベンチの近くに倒れる三匹を見て、ザルトヘルは頭を抱えた。

「ふあーｗｗｗｗｗワンターンスリーキルウ：ｗｗｗｗ」

ボウシは意味の分からなさに爆笑した。

「うるせえ！」

このあと滅茶苦茶。ポケセンに運んだ

「ふん…本当にバカな奴等ね…」

おやこドンはいつたい、いつになつたら打ち解けるのだろうか。
つづく

実際のプレイでヤミラミ使つたら泥試合になつたで
ゞゞる

「S I D E Nをトウカジムに超エキサイティング！」

「略すとなに言つてるか余計わからんわ！あとS I D E Nを蹴るな
！」

毎度の如くジムを破壊して参上するのはゞ存知ボウシとそのポケ
モン ザルトヘル、S I D E N、青団子、おやこドン、うまま棒。
今回はここ、トウカジムに挑戦だ！

「言うてS I D E Nで完封出来るやん、よゆーよゆー」

「……へ？俺今補助とシャドボしかセットされてませんよ？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「解散」

「無能」

「と言うか絶対PP尽きるやん」

「なんで俺が責められるんですかねえ!?」

「ポケー」

「いいからとつと進もうぜ。」

ザルトヘルに急かされ、渋々奥の部屋に進む一行。

ジムトレーナー？それならさつきS I D E Nを蹴り飛ばした時に
直撃して倒れどるよ。

「おい…バトルしろよ…ガクツ」

ジムリーダーの間……の前

「オラ！開けろ！開けないと扉バンバンするぞ！」バンバンバン

「扉バンおじさんやめろ、あともう叩いてるがな。」

「かくなる上は…うまま棒！ニードルアーム！」

「うおー！やつたるでえ！」

ガチャリ

「すまない、用を足してい……」

「あつ」

「あつ」

「アフ」

「あら」

「へ
ア
!?

迫り来る拳

運悪く開らかれた扉、そしてそこにたつセンリ。

センリさんは2D6のダメージロールを。

「（私がいつたい…何をしたと言うんだ……）」チーン

「するまでもなく死んとするやんば！」

「セントリーゼ！ シムリーダー不戦敗とかますいですよ！」

「……ワナワナ」

「ポケー：もしもしポリスメン？」

「やめろお！（建前）やめろお！（本音）」

「とにかく元気のうちに食事をしなさい」といふので、二台寮が唯二つ

「アフターはアフターで治療が難だれ！」

「お前も治つてんじ

「ザルトヘルがストレスで胃がマツハだからCMに入るか」

「おう、メタ発言やめーや」

だーれだ?

ドライブオン！

「おい、CMバグつてたぞ」

「えーなに？ バグるアッブ？」

「そうそうデーンジャーデーンジャつて自称神は帰れ。」

「あー、ごほん。準備はいいかい？」

一度状況を整え、ジム戦の準備を始める両者。

今回はダブルバトルらしいが：

「よつしやうまま棒とおやこドンでいいか」

「やつたるでえ！」

「めんどくさいわね…」

「なら私はケツキング！ そしてマツスグマ！」

「眠いンゴ」

「<高速化><高速化><高速化>」

「おう、片方デュアルアップすんのやめーや、よし！ バトル！」

「開始！ まずはケツキング！ キガインパクトだ！」

「よつこいしょ……ウオオオオオオオオツ！」

「ウルトラダイナマイツ！」

「おせえスツ」

「ハイハイ回避回避スツ」

「鬱だ寝よう（怠け）」

「そつちは囮さ！ マツスグマ！ すてみタックル！」

「<高速化><高速化>キメワザ！」

「うまま棒！ 後ろだ！」

「へつ？ ホツ!?」

マツスグマの突進！

うまま棒は吹っ飛ばされた

「チヤ……」

そのままアイアンテール！

「<鋼鉄化>」

マツスグマのアイアンテール！

うまま棒は叩き付けられた！

「アー！」

「うまま棒！……やつてくれるわね、イタチの分際で……」

「イタチがあれ……？」

「アライグマ辺りじゃなかつたか……？」

「むしろなんでうまま棒まだ動けんねん」

「アイタタ……このフェレット、やけに足が早い……！」

「そのどうり！私のマツスグマは特性、はやあし。そして持ち物はどくどくだま！倒れる前にけりをつけさせて貰うぞ！」

「それはどうかしらね」

カン☆コーン

「何つ!?…マツスグマ!?」

「この手に限る」

「＼メロメロ／＼メロメロ／＼！」

マツスグマはおやこどんにメロメロだ！

おやこどんのブレイブバード！

マツスグマは倒れた

「ゲームオーバー！」 チュドーン

「マツスグマー！くつ、まさか止めるとはな……だが私にはケツキングが残ってる！」

「Ｚｚｚｚｚｚ…」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「（お前が寝てどうすんねん…）」

「トウカジムはマトモだと思つた？残念いつも通りだよ！」

「ぐだぐだじやないつすかヤダー！」

「とは言え、私はあんな脂肪の塊を殴る気は起きないわ……うまま棒。任せたわよ。」

「任されました！食らえ…必殺の…」

ギリギリと音をたてうまま棒が拳を握り締める

「爆裂パンチ！」

うまま棒の爆裂パンチ！

効果は抜群だ！

ケツキングは爆発した！

ジムに効果は抜群だ！

「あつ（察し）」

「あつ（マツシ）ブーン…」

「叩き付けてやるのさ（ジム崩壊）」

「倒壊オチなんてサイテー！」

「なんてことだ…！とりあえずバツジは避難してからだ！」

「なんと言ふことをしてくれたのでしょうか」

「質素なジムは今や瓦礫の山に」

「あつ、修理費は親父の給料から差し引いといて」

「結果は兎も角私に勝利したのは事実…バランスバツジを君に授けよう。」

「やつたぜ」

「それとだな、ヒマワキシティの付近で海賊みたいなのがうろついてるから気を付けるように」

「海賊？…今時珍しいなあ。」

「（あつ、こいつ完全にアクア団のこと覚えてないな）

※フエン火山はマグマ団がどうにかしてくれました。

「ボケー……」ガラガラ

「真顔で瓦礫から出てくんのやめろ」

「つーか逃げてなかつたのかよ…。」

ホウシショウエムウ！

「おい、上にゾンビ沸いてんぞ」

「はいはい、初手メメタア、そんで次はヒマワキでしたつけ？」

今日も今日とて懲りずに旅を続けるボウシ達、トウカジムを後にし今はヒマワキシティを目指し草むらを掻き分けていた。

「ふあーｗｗｗｗ前が見えねえｗｗｗｗ」

「手当たり次第にかつさばいてるが切りがねえなこれ。」

「フハハ！環境破壊は気持ちいいＺＯＹ！」

「（草タイプがそれを言うのは）違うだろ？」「

なおおやこドンは一足先に飛んでいった模様。

「あいつマジでなつかない…、これもうわかんねえな。」

「ファー、しかも雨も降ってきやしたよ！団子は兎も角風邪引きたかねえし雨宿りしやしよう」

「ポケー…デーヌン！　ＳＩＤＥＮ、タイキック」

「ファ!?」

「ここがあの女のハウスね」

「どうみても研究所なんだよなあ。」

雨宿りが出来そうな場所を探すボウシ達は近くのお天気研究所へと立ち寄った。

「ちわーす、三河屋でーす」

「んあ？」→アクア団員

「ザルつ！腹パン！」

「こいつはサブちゃんではない（無言の毒突き）」

「ウツ！」

「何で海賊が居るんですかねえ、サラザールニキ仕事して。
「すんませんその人三角領域から出れないんですよ。」

「ワーワーナンダナンダ？テキカー？」

「おうおう、賑やかになってきたぞ？どうする？」

「ん？ そんなの決まつてんだろ」

「やつとマトモな作戦すか？」

「オメー、後でケツバットな？ こんなもん見敵必殺に決まつてんだ
ろ。」

「ポケー　い　つ　も　の」

「お　ま　た　せ」

「この手に限る」

「助かる」

「何か今、余計な奴居やしたよね!?」

「そこまでだ！ 侵入者ども！」

野生のアクア団員×5が現れた！

「野生じやねーよ！ ふざけてんのか！」

野生のアクア団は怒つている！

「ふざけやがつてえ！ いけえ！ ポチエ　r　y」

「(無言の顔パン)」

ザルトヘルの顔パン！

アクア団員は倒れた…

「なつーなんなんだコイツら！」

「なんなんでしようねえ…自分でも分からんすわ。」

「そおい！」

遠い目をしているS I D E N^gとアクア団員をぶん殴る青団子

「ビンビンビン　チクツ」

「ニードルアームには気を付けよう！ チーン」

次々に穴にニードルアームをぶちかましていくうまま棒。

「もうあいつ一人でいいんじゃないかな？」

もはや指示すら出してないトレーナー。

「こゝは地獄か…ガクツ」

「地獄の二丁目で待つとるんじやい。」

「すまんがミミズじいさんはNG、さてとつとと全員シバくか！」

フヤジヨウノウケタントウメイドフクナイト

「ふう…何かシバいてる間にとんでもねえワードが飛んでいた気がするが…気のせいか。」

「気のせい気のせい、つてあいつ逃げとるし！ザルGO！」

「へーへー、そんじゃま追い掛けるか。」

ザルトヘルが逃げ遅れた団員を追い出した後…。

「本当に！本当に！ありがとうございます！」

「東 京 タ ワ 一 が 赤 い 理 由」

「やめろミザエル」

とりあえず研究者達を助けたあとお礼にポケモンの卵を貰うのだった。

「ポワルンは大事ですからね！だから拾った卵で勘弁を！」

「ポワルン：晴れ：エクスウーラーカリバアーッッ！うつ、頭が…」

ボウシの脳裏にはまだ見ぬ未来のビジョンが走る。

「なんか頭抱えだしちまつたんで受けりますわ、さーてザルニキはどうなりやしたかね。」

「やめろー！シニタクナーライ！シニタクナーライ！」

「お前は最後に殺すと言つたな（言つてない）」

「そうだドラピオン！助けてくれ」

「あれは嘘だ」

研究所前の橋から突き落とされるアクア団員くん。

「ウワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！」

「オーラザルー！」

「ん？」

研究所から出てくる一行。

「あいつは？」

「離してやつた。」
「「「「やつたぜ」」」

筋肉MAX大変身！ 最大級のパワフルボテイ！

「ヒマワキに着いたけど何かが邪魔して入れないンゴ」

「ンゴゴゴヌメルンゴwww」

「ヌメルゴンへの熱い風評被害」

今日も今日とて旅をするマジキチ集団ことボウシ達、ジムに入れな
いため一度120番道路でレベリングすることにした

「いやー割りと皆育つてきたしヒマワキも楽シヨーでしょ。」

「ぶつちやけうま棒以外ならなんとかなりそう」

「お？ ゃんのかくそ主人？」

唐突に殴り合いを始めるトレーナーとポケモンを尻目にザルトヘ
ルは受け取った卵の世話をしていた。

「いつたい何の卵なんだか：割りと揺れてつから近いうちに孵ると思
うが…。」

ザルトヘルは一度ため息をつくと卵を布でくるみ、背中に抱える。

「ま、ガキの面倒なら見慣れてるし最悪SIDENに任せるとか」

「ファ!? マジっすか!? つーかそれよりも助けてくだせえ！」

「なんで溺れてんだあのバカ」

「団子にぶつかって落ちたのよ。」

「この川！」 深いっ!! オボボボボボボツ!!

「溺れ死ぬSIDENかな？」

「すまんが例のあれネタはNGって殴りあいは終わつたのか。」

「いやあサボネアは強敵でしたね…」 ↑顔面棘まみれ

「やつちまつたぜ！」

「あつ、沈んだ」

「忘れてた」

「ちくしょう…ぜつてえ許さねえユグドラシル…」

「野生のアブソルニキが助けてくれたのはビックリ」「めっちゃ御説教くらつたけどね！…ん？誰か来た」

「やあ、またあつたね」

「誰だお前は！」

「地獄からの使者！スパイだ…ゲフンゲフン、ダイゴさ、ムロタウンで会つただろう？」

「あれを会つたにカウントするとかストーカーかよ…」

「うん、僕が悪かつたから露光なバックステップ止めて、流石に傷つ

く

キングクリムゾン！

「デボンスコープゲットだぜ！」

「露骨にカットされた氣もするが…まあいや、あつキミにこれを上げよう」

ボウシはメガバンブルを手に入れた！

「それとこれ、君はミズゴロウを選んでたみたいだから

ボウシは“ラグラージナイト”を手に入れた！

「ポケー」

「これがあればキミのラグラージはメガシンカ出来るんだ、それじゃあまた。」

「行つちまつたな、色々渡すだけ渡して。」

「団子はまだヌマクロ一なんだよなあ…」

「つーかこのポケーとしてる状態で進化するんすかね？」

罠発動！強制脱出装置！失せろカクレオン！

「ふはは！バカめ！姿の見えぬ私をどうやつて対象に取るのだ！」

つデボンスコープ

「？（^○^）＼」

「よく来ました…私はジムリーダーのナギ」

「カメレオン野郎のせいでダイナミックエントリー出来んかったわ」

「しなくていいんだよなあ…」

「手持ちポケモンは2体…さあ私と共に風になりましょう！」

「そこに居なさそう」

「とりあえず団子いってこい！」

「お行きなさい！エアームド」

「……」

「エアームド！つばめ返し！」

「避けろ団子！」

「……」

しかし青団子は動かない！

「ちょ、団子…どうした？寝てんのか！」

「……んな…」

「？…構いません！エアームド！徹底的につばめ返し！」

だが青団子は動かない！

「青団子…どうして動かないん…ん？」

「…けん…よ」

「口より手を動かしたらどうかしら…エアームド…どごめよ…」

「青団子つー！」

「あつおしめえ」

「ぎつけんな『ラー！』」

エアームドをぶん殴つて床に叩き付ける

「!?」

「!?」

「どういうことだ…」

「ホツ！ボウシ！団子が光つてる！」

「…許さねえ…ダイゴゼつてえ許さねえ！ピカーン！」

おめでとう！青団子はラグラージに進化した！

「なんか吹つ切れおつた」

「なあにこれ」

「凄く…キモクナードです」

「くつ！しかし進化した所で！エアームド！鋼の翼！」

「青団子！やれ！」

「早いだけの奴にい！俺は倒せねえんだよ！アーム…ハンマア！」
(エアームドの首が折れた音)

「ひでぶ」

「そんな…エアームドが一撃…？ありえない」

「うわ…ゴリラ過ぎ」

「でもなんで進化したんだ…？」

「あのクソッタレ！俺が鬱なのを良いことにラグラージナイトを渡して煽りやがつてよお…ぜつてえ許さねえ！」床バン

「〔（もしかして→逆恨み）〕」

「流石に草はえるはこんなんｗｗｗｗ」

「くつ！こんなふざけたポケモンに倒されるとは…ならばチルタリス！貴女の出番です！」

「模擬刀の先制攻撃だべ！青団子、岩石封じで押さえ込め！」

「了解！オラツーン！」床を壊して破片をぶん投げる

「避けてムーンフォース！」

爆風に包まれる青団子

「効かねえな…筋肉があるから」

「うーんこの脳筋理論」

「…つ仕方ありませんね…チルタリス！ゴットバード！スタンバイ！」

！」

空高く舞い上がり力を貯めるチルタリス。

「ボウシ！あれだよ！あれ！」

「ウルツプおじさん思い出した、はいはい、メガシンカね。」

「どこまでふざけるおつもりですか!? メガシンカはポケモンとトレー
ナーの強い絆が…」

「少なくとも俺はボウシを信じてるぜ…行くぞMAX大変身！」

「嬉しいこと言つてくれるじゃないの、なら期待に応えるか！進化を
越えろ！メガシンカ！MAX大変身！」

ボウシのメガバングルと青団子の持つラグラージナイトが目映い
光を放つ、その光に驚いたチルタリスはゴットバードを発動した！

「なつ、チルタリス！今は…駄目です！」

飛行タイプ最強の技、しかしそれは…

無慈悲な筋肉によつて防がれてしまった。

「メガラグラージ…見参！オラオ！」

受け止めていたチルタリスを全力で殴る、チルタリスは抵抗する間
も無く壁へ叩き付けられた。

「「「なんだこのゴリラ?」」

皆が騒ぐのも無理はない、青団子は今、肉団子と称してもいいいくら
いに筋肉もりもり、マツチヨマンの変態になつてているのだから。

「地の文後で殴る、さあ心が滾るぜえ！」

「ふあーwwメガシンカやべえwwよつしや、青団子！追撃のアーム
ハンマー！」

「くつ！飛びなさいチルタリス！…チルタリス!？」

「羽が挟まつて飛べない（：・ω・：）」

「そおい！」

効果が今一つ？知つたことか、戦いつてのは至つてシンプル

殴 れ ば 倒 せ る

(チルタリスの頭蓋骨が割れる音)

ジムリーダーのナギに勝利した！

「そんな…こんなふざけた方々に私も負けるなんて…」
その場に崩れ落ちるナギ。

「ボウシ！俺は決めたぞ！あの大誤算野郎をぶん殴る！」
「おう！やつたれやつたれ！」

「ファーゾウマジで大誤算過ぎんだろゾゾゾゾ」

倒れてるナギの懐からバツジを取り出すうま棒。

「あつ、ジムバツジ貰つとくんでじやあの」

（3分後…）

「あれ？ いつの間にか居ない…」

その後ナギは数日間スランプに陥つたと、SNSサイトポケッタード話題となつたが…理由は不明である。

「さーて！ 団子の祝いも兼ねてミナモに着いたらパーティーすんぞ！」

「イエエエエイ！…つて姐御がまーた先に行つちまつたよ。」

「…まあ、女心つてのは複雑だからな。」

「ザルニキが言うと割りと納得できる」

「ぶつちやけザルは会つたときから老けてるからなあ」

「おつ？ ゃんのか」

殴りあいで120番道路荒らしたので

このあとめちゃくちやアブソルに怒られた

ざわざわなんちやらのなんこちゃん

「いやあ水着ピックアップは強敵でしたね…」

「サモさん来なかつたすね…」

「青団子 GO！」

「マ ツ ス ル ス パ ー ク」

「アイダダダダダダッ！死ぬ！ゴーストだから死んでるけど死ぬつ！つーか痛てえ！」

「なんで使えるのかはツツコまねえぞ」

「おんぶ紐で卵おんぶしてることにツツコミ入れていいつすか？」

「入れてもいいが毒づきするぞ」

今日も今日とて好き勝手過ごすボウシ達、トクサネを目指す前にミナモシティで丸1日休憩することにした。

「つーかどうする？俺はチケット買つたらポケセンで休むけど」

「あー、俺と団子はデパート見ますかねえ、うまま棒は？」

「釣りですかねー、姉さんはまーたどつか行つちまつたし、兄さんは？」

「てめえらナチュラルに俺に卵を押し付けてんじやねえぞゴラ」

ミナモデパートで買い物するSIDEENと青団子。

「いやー、団子がゴリラになつたから荷物楽やわー」

「お前は会つたときから変わらず貧弱だよなー」

「うるせえ！未進化ポケの悲しみが分かつてたまるか！」

通りすがりのミミツキユ「それな」

「なんか今アローラのやべー奴が居たような…」

「剣の舞、化けの皮…じやれつく…うつ、頭が…」

ミナモデパート屋上

「……」

おやこどんは1人、屋上で青空を見上げていた。

ここから飛び立てば時間は掛かれどシンオウに帰れるだろう。

しかしそれは出来ない——父から教わった大事な教え：約束

だからだ。

(次に戻ってきたときは…お前が認めたトレーナーを連れて戻つてこい：私も娘を任せられる相手か知りたいしな)

思えば父と話したのはこれが最後だった、おやこどんは深くため息を付き、自らのトレーナー…ボウシを信じることが出来ない自分が嫌になつた。

「意地つ張りなのは治らないわよ…本当に…どうすりやいいのよ」

意地つ張りな性格故にボウシを信じられない、おやこどんは再びため息を付き、サイコソーダ（三本目）の蓋を開けるのだった。

海岸

「釣れねえ…」

ポケモンセンター

／ミエールカナーコノバショニイールコトーラー

「尊い（突然の語量力喪失）」

「休むつておま、アニメの一挙放送見てんのかよ」

部屋のTVでやつていた一挙放送を見るボウシと荒ぶり出した卵を暖めるザルトヘル、先程から卵がやたらめつたら動き始め、ザルトヘルは手をこまねいていた。

「まー、そろそろつて…ヒビ入つてるやんけ！」

「ア”？…マジだ、どんどんでかくなつてくる！」

テレレレン テツテツテツテツテレー

テツテツテツテツテテテレー

ピコーン

「がおー！」

おめでとう！卵からヨーギラスが産まれた！

「なんでヨーギラスなんだよ…。」

「そういうや拾つた卵って言つてたな…何かザルのことスゲーみてんぞ」

「ジー……」

「…オイ、俺になんかよ」

「パパ！（顔に飛び付く）」

ヨーギラスはザルトヘルの顔に飛び付き、頬擦りをし始めた。

「ア…刷り込みつてやつかー」

「このヤクザ早々に諦めおつたぞ。」

「パパー！スリスリ」

「アーハイハイ、分かつたからパパの頬を摩擦で焼くのは勘弁な。」

「ヨツシヤ早速名前つけるか」

「ふーん、そんなことあつたんだな。」

数時間後、すっかり日も暮れて皆が帰つてきた所で産まれたヨーギラスを紹介していた。

「ザルトヘルが一児の父になつた事にはMAX大草原だつたけど笑つてたら腹パンされたわ、マジで容赦ねえよこのヤクザ」

「なんでトレーナーが瀕死なんですかねえ…、と言うか名前は決まつてるんすか？」

「決まつてるぞ、ほら皆に挨拶しな。」

「はーい！ バンこだよー！ よろしくね。」

「はいかわいい」

「うまま棒、ギルティ」

ドスツ

「毒タイプに勝てるわけないだろ！チーン」

「パパトヘルかな？」

「そおい！」

ドスツ

「(無言の気絶)」

「ザルニキが早速過保護に片足突っ込んでる…これもうわかんねえな。」

「わーい！みんなのしそー！」

「お嬢さんはあつちでご本読んで上げるから行こうか！」

せめてこの娘だけは優しい娘になつて欲しい、ザルトヘルとS I D ENの中でその思いは一致したのだつた。

ツンデレじゃねえ！意地つぱりだ！

悪タイプだらけ！前回の3つの出来事！

1つ！ ボウシがザルトヘルに腹パンをされた！

2つ！ うまま棒がザルトヘルに腹パンをされた！

3つ！ 可愛らしいヨーギラス、バンこが産まれた！

「なんで2／3が腹パンなんですかねえ」

「知らんな」

「毒タイプに勝てるわけないんだよなあ…」

ミナモシティからトクサネシティに移動したボウシ達。

しかしジム戦を前にS I D E Nは魚が当たり腹痛で動けず、うまま棒はザルトヘルの腹パンが未だに回復していなかつた。

「M A X 大草原」

「俺も悪いが次のジムは俺と団子で行くしかねえな。」

「わたしもたたかうー！」トテトテ

「バンこにはまだ早いかなあ～ほーら高い高い～」

「ザルニキが完全に親バカ発症してんだが」

「まあなんとな 「ゴフツ～！」 ……はつ？（半ギレ）」

「……すまん、腰やつたわ」

「キーボウノハナーツナイダーキズナヲー」

「ボウシがとうとう諦めたぞ！」

「ジムリーダーが今日を逃すと暫く居ないから行くしかねえが…団子お前一人でダブルバトル出来るか？」

「ソルロックとルナトーン使うのは知ってるから波乗りで吹っ飛ばせばヘーキヘーキ」

「おやこドンは…トクサネ着いた途端にどつか行きおつたからなあ…いい加減言うこと聞いてくれねえかな。」

「あいつは親父譲りの意地っぱりだからなあ…アイタタ」

「腹がいたいんだ」…そいやザルニキつて姉御と知り合いなんすよね。」

チーン 毒ナイフには気を付けよう！」

（何かうまま棒が死んでるがまいいか）シンオウにあるマフィアが
有つてよ、あいつはボスの娘でな：昔はまだ可愛げあつたが

「あー、だからあいつずっと闇の石持つてるのか…そりやマフイアならどつかから入手できるわな。」

「アイツの親父とは戦友でな
んだ。」

「サルニギハツイチとかマシかよ」

「治二たら腹ノンな? まだからアイツのことは知ってる:だから
これだけは言つとくぜ。」

「アイツはどんでもねえ意地のほりなだけだ」「でな」

「僕が君で！」「貴方が私で！」

!?

「フウ！ここはコンビネーションで倒そう！」

「分かってるよテント! やあ君の罪をかそえや!」

ウカジム崩壊事件、チルタリス撲殺 etc...)

「もしや俺のトレーナーってヤベーやつなのでは?」

〔（氣付くのが）お世一よホセ〕

「ハトル開始！ ルナトーン！」　ハトル開始！ ソルロッケ！」

「念力」
吉田三
酒井千人

「動けねえぜ！」

ふあー わ わ これだからエスパーは嫌やねん わ わ わ わ

「ルナトーンはそのまま束縛！」『ソルロック！ ソリテリヒーム！』

「たいよおおおおおおおおおおおおおつ!!」

ソルロックのソーラービーム！

効果は抜群だ！

「4倍に勝てるわけないだろ！ 何とか耐えただけど動けねえぜ！」

「詰みです？（^。o^）＼

「たいよおおおおおおおおおおおおつ!!」

「ヤメロー！ シニタクナーライ！ シニタクナーライ！」

パリーン！

抵抗する団子を余所に、ジムの天窓をぶち破り黒い何かが落下してきた。

おやこドンの不意打ち！

効果は抜群だ！

「アバー！」

「あつ…姉御お！」 ブワア

「おやこドン…お前つ！」

「つたく…私のトレーナーの癖して何負けようとしてんのよ！ 全く

！」 プンスコ

「アツハイ

「こ→こ←だけC Vくぎゅですわ」

「あ” あ”!!」

「そろそろふざけるのやめねーと殺されるな、うん。」

「むつ！乱入とは…」「でもこれで2対2……ソルロック？」

「……チーン」

カーナーシミノームコーラヘトー

「ソルロックが死んだ!?」「この人でなしい！」

「うるさい子どもね…ボウシつ！」

「んあ？」

「いい加減認めてあげるわよ！ あなたは私のトレーナー！ そんで信頼はしてやつてたわよ！」

「アツハイ」

「突然デレ期つてやつすつかね…それはそうとルナトーン、下ろしてくんね？」

「駄目です」

「絶許」

「だから…使いなさい！」

ボウシは闇の石を手にいれた！

「よつしやラツキー！ 行くぜおやこドン！」

テレレレン

テツテテテ r y

おめでとう！おやこドンはドンカラスに進化した！

「例えルナトーンだけになつても負けはしない！ルナトーン！そのラ
グラージをドンカラスにぶつけろ！」

「バカキヤノン！発射！」

「誰がバカだこの月野郎!!」

「邪魔」ハガネノツバサ一

おやこドンの鋼の翼！ 急所に当たつた！ 青団子は倒れた…

「何か今日の俺の扱い悪くない…悪くない？…ガクツ」

「仲間を攻撃するなんて…君には血も涙 r y「おやこドン！辻斬り！」

話を遮らないでよ！」

おやこドンの辻斬り！ 急所に当たつた！ ルナトーンは倒れた

！

「悪タイプには気を付けよう！」 チュドーン！

「そんな…」「ここまで酷いチャレンジャーは初めてだ…」

他ジムリ「おつ、そうだな。」

「な？言つただろ、意地つぱりだつて。」

「そうだな、それはそうとまさか仮病とは…仮病するヤクザとは…ウ

ゴゴ」

「わーい！お姉ちゃんモツフモフ！」

「バンこはいい子ねえ…よしよし」

「何か姉御デレでない？」

「あればメスの顔つてやつか！」

おやこドンのブレイブバード！
チユドーン！

S I D E Nは倒れた！うまま棒は…しつ、死んでる！？

「止まるんじやねえぞ…」

キーボウノハナーツナイダーキズナヲー

「こいついつも死んでんな。」

「なあボウシ、とりあえずバッジも取れたし姉御も進化したから
パツーといかね？」

「しうがねえな、この辺りに美味しい飯屋あるらしいからじゃけん夜
行きましょうね～」

「やつたぜ」

「ふーん…変わった子達だねえ…ね？ シガナ」

でもノクタスつて不意打ち読まれやすいんだよね

ポケモンセンターの宿室

今日も今日とて彼らはホウエン地方を旅していたのだが訳あって数日このトクサネシティで滞在していたのであつた。

「これまでの遊戯王VRAINSは！」

「（原作が）違うだろお？」

「ちーがーうだーろー！チガウダロー！」

「バンこの教育に悪いから止める」

「パパー、チャンネル変えていい？マスカレードファイターへラクロス見たい！」

「まだやつてるのかあの番組……んで？うままはどこ行つたし。」

ザルトヘルが部屋を見渡す。

「さあ？私は爪研いでたから見てないわね」

ソフアで爪を研ぐおやこドン

「俺は大誤算のブログ荒らしてから知らね」

備え付けのパソコンで荒らしをする青団子

「そもそも今帰つてきたきتانすよねえ…」

そして今帰つてきたSIDENと…

「気が付いたらボールから出てたぜ！」

このトレーナーである。

「はあ～（くそでか溜息）つつかえ」

「娘出来てからこのヤクザ辛辣じやね？」

「で？どうするのよ、あそこ行くのに全員で行くんでしょ？」

ボウシ達が頭を抱えるとポケナビに通信が入る

「んあ？はいはいボウシだよ。」

「おーう、リーダー、久し振りだな？ザルは元気か？」

電話の主はどこぞの海賊を思い起こすような飄々とした口調で語りかけてきた。

「ミドラーじゃねえか、てことはもう着いてんだな？」

「あつたり前よ、契約も取つてきた、後は合流するだけだ。」

ボウシとミドラーが会話をするなかSIDENは窓から辺りを見回していった。

「うまま棒のやつ見当たんねえ」

「流石に逃げた訳じや無さそうだけどあいつ最近死に芸人みたいな感じだつたもんな。」

「精神崩壊してた奴がなに言つてんのよ」

「やめろ姐御、その言葉は俺に効く。」

「おーい、何かうまま棒のやつもう合流してるみたいだわ」

「ふあ!?」

「草」

「これは草」

「M a x 大草原ー?」

「覚えなくて良い言葉だぞバンこ、もしやあいつ時間ミスつて早くでたのか?」

「いや、この部屋の時計が一時間ズレてたわ」

「ここガバ」

「この部屋の時計ガバガバじやねーか!」

「再走して、どうぞ」

「うつそだろお前……」

「じやけん今すぐ行きましょうねー」

「おせーよホセ」

「おいおい、そのニードルアームを下ろしてくれ、おつかなくて話も出来ねぇ、Ok?」

「Ok!! ドン! (腹パン)」

「罠発動! バカガードマッスル! 青団子を盾に攻撃を無効にする!」

「進化してなかつたら死んでた: (死にかけ)」

「やっぱ四倍に勝てるわけないんだよなあ:」

「やっぱお前ら面白れえな: よつ! 炊事担当系毒タイプのミドラーさんが来てやつたぜ」

頭にコツク帽を乗せたドラミドロ：彼こそがカラスでの仲間の人、ミドラ。

そしてその後から二匹のマーライーカーを抱っこするカラマネロがやつて來た。

「久し振りね皆、初見の子もいるけどね」

「カルロ！そつかオメーら結婚したんだつたな。」

「ええ、ほらこの子が私たちの子供のカルロ二世と三世よ。」

スヤスヤと寝息を立てるマーライーカー達、荒れ狂つてたうまま棒もこの寝顔を見たら流石に落ち着いたようだ。

「よつし！全員揃つたし：行くぜ！俺達の拠点に！」

あつ、これ続く感じなのね b yナレーター

アルファサファイア編（2クール目）

なんかもうアオギリさん出てくるビジョンねえわ

「俺は青団子！ 19歳のある日にあつたまのおかしいトレーナーに連れられ、ホウエンを巡る旅に出た。所が進化した俺を世間はバカにし、心を痛めた俺をD A I G O さんとか言うくつそふざけた石マニアはラグラージナイトを渡すと言う今世紀最大の煽りをしたお陰で俺の怒りが有頂天に達してラグラージに進化出来たんだ！ さあどうなる第13：14だつけ？」

「天空寺なのか謙虚なナイトなのか焼き肉太郎なのかハツキリしなさい」

「姉御の雑学範囲なんなんすか」

「焼き肉食いたくなつたな…ミドテー今田焼き肉な！」

「やめろカルロ、それはほぼ全員に効く

「んじゃ…とりあえずミーティングでもしますかな」

【第1回】 ホウシのお店ミリティンケ

「んあ？ どうしたうまま棒」

「何か進化してた」

「フ
ア
ー
W
W
W
W
W
W
」

草

「それは草」

Mazx 大草原

「今こそ草は極まれり」

「わー！お姉ちゃんおめでとー！」

「よし、バンこ以外はニードルアームな」

「寝てる時に部屋に入ってきたドクケイル殴つたら進ww化wwとかwwww」

「隣の芝刈不可避」

「おーし、SIDENはまーだ殴られ足りないみたいだな」

「うまま棒のニードルアーム！」

SIDENは倒れた！

「んじゃバカは置いといて、店をどうするか決めないとな」

ボウシ達が現在いる場所：トクサネの外れにある喫茶店

ボウシ：厳密にはミドラーがそこを買い取り、新しく店を開こうとしてるのだが…

「俺らが本格的に手伝えるのは大誤算仕留めた後になるからそれまでにミドラー達だけで準備とか任せることになるなー…」

「あー、一応イベとか、ニアミとかクソパンダに連絡はしたけど來るのかねえ…」

ボウシはカロスでの仲間：イベルタル、ブラツキーのニアミニアベ、クソパ…ゴロンダのゴンニキを思い浮かべるがどいつもこいつも社会不適合者なのを思い出してため息をついた。

「あいつらがあ…ねぼすけゲロビ鳥にマダオにヤベー兎に付きまとわれてるヤンキーだしなあ…」

ザルトヘル、SIDENも同じく思い浮かべてはため息をついた。
「やだ…俺らの先輩つて無能多すぎ…」

「多分あんたに後輩が出来たら同じこと言われると思うわよ」

「とりあえずスタッフはこっちで面接しとくわ、まあ…なるはやでその大誤算とやら叩いて帰つててくれや」

「まー、そうなるよな…はい、ミーティング終わり！ルネに向けての買物しに行くぞ！」

勢いよく扉を開けたボウシ、そこには満天の青空が…

「緊急速報です！現在ホウエンで大雨が突如降りだすと言う異常事

態が発生します!】

庄かにてなかつた

空は雲に覆われ、滝のような雨が降り続いている。

ハ
ダ
ン

—

三

空は雲に覆われ、滝のようなるが

「おしゃれおしゃれ」

おもむろにバシニがテレビを守り、そこま先ほど聞こえてきた

放送と同じことか流れていった。

「こしても突然ねえ…」

「なんだこの大災害…たまげたなあ」

「お前がアーヴィングの本を読んだんだ？」

「あつ、ボウシくん！ちょっと頼みたいこと ry」

—14万から受け付けますよ

「どーせ、この大雨が何ね

卷之三

「……はつ？」

「だーかーら！伝説のポケモン、カイオーラが目覚めちゃつたから

対処法なんか調べてきて「て言ってるの！」

「……もしやこの博士アホなのでは？（しゃーかないなあ
ますよ）」

「逆！本音と建前が逆！：：一応トクサネにいる助手に船を出すように連絡つけてあるから後は頼むよ！ プツ」

「はあ～（くそでかため息） しようがねえやつてやるか！」

「お？なんだなんだ」

ボウシの回りに集まる一同

「カルロ、ミドラバンこ以外は俺と一緒にルネにカチコミじやい！分かつたか！」

「どういうことだ!?まるで意味がわからんぞ!?!」

「うるせえ！話は船でする！行くぞ！」

「ファーウWWWW」

突然目覚めたカイオーラ、次回！ルネシティで大決戦！

荒海の決戦

前回の悪だらは！

オダマキ博士に依頼され、突然の異常気象の元凶、カイオーガについて調査することになつたボウシ達。

船酔いとの激闘を繰り広げながら彼らはルネシティの断崖に辿り着いていた！（座礁したとも言う）

「畜生……こんな荒れてたらダイビングも出来ねえ……
「流石にこの崖はキツいっすね……」

「トロピウスでも居たらひとつ飛び出来るんだけどなあ」「そこの君！」

ボウシ達が崖を前に座り込んでいると潜水艦が海から現れ、スピーカーで声をかけてきた。

「私はルネシティのジムリーダーミクリ！オダマキ博士の使いの君達を迎えて来た！すぐ乗つてくれ！」

「やつたぜ」

「成し遂げたぜ」

「助かる」

「本社爆発」

「本社は関係ねえだろお!?」

潜水艦の中でボウシ達は変態のような格好をした男、ミクリから事情を聞いていた。

「はあー……寝てたカイオーガが唐突に起きたから疲れ果てさせる作戦ねえ」

「確かにあんなデカブツ起こしたままは邪魔よねえ」

「それはいいんだけどさ……」

ボウシはミクリの手にしている藍色の宝玉を見て溜め息をつく。

「なんでわざわざパワーアップさせるん？」

「そつちの方が疲れて眠る時間長くなるからね！」

ミクリの爽やかな笑顔を見て内心「(あつ、こいつ苦手だわ)」と感じるボウシであつた。

ルネシティ内部に到着するや否やボウシ達は陸に上がり、ミクリは潜水艦でカイオーガに近付いた。

ルネシティのど真ん中でアホ面をしたまま浮かぶカイオーガ、どう見ても自分がやらかしている事を理解している顔ではなかつた。

「悪意がないって一番嫌よね」

「悪タイプの俺らが言えた義理じゃねえっすけどね!」

「そろそろだ…おやこドン!俺を運べ!」

ザルトヘルの声と共に彼の頭をガツシリをホールドして飛び立つおやこドン。

ボウシは陸地からSIDENらと共にザルトヘルとおやこドンの支援に回ることになつた。

「さあ…カイオーガよ!藍色の珠を受け取りたまえ!」

藍色の珠を全力で投げつけるミクリ、瞬間。

目映い光がルネシティを包みその直後、雨は更に激しさを増した。

「あれが…ゲンシカイオーガ…」

「サイコフレームかな?」

突然のことでのカイオーガ自信も驚いたのがつんざく様な咆哮を挙げ、巨大な波を起こした。

「あつ、これ俺ら…」

「やべ、団子!波乗りだ!」

「あつ!SIDENが乗り遅れ…」

「あつ!この海、”深い!”オボボボブウア!」

ボウシ達に襲い掛かつた巨大な波、その中から青団子に乗つたボウシとなんとかしがみついたうまま棒が出てきた。

SIDENの姿はそこには無く、先程の場所にも見当たらない。

「SIDEN…嘘でしょ…」

「おい！ＳＩＤＥＮ！紫もやし！返事しゃがれ！…………ＳＩＤＥＮ！」

上空で事を見ていたザルトヘル達もＳＩＤＥＮが波に呑まれてしまつたことに気が付いた。

「……最後まで…バカな子ね」

「ＳＩＤＥＮ…手前の仇…取つてやるからな！」

そしてミクリもまた潜水艦が転覆し、自らの手持ちであるミロカロスの波乗りでボウシと合流した。

「ボウシ君！…あのヤミラミは…」

「あいつは…始めてあつた時からバカで、妙に気が合つたんだ」

「ボウシ…」

ボウシは顔を上げ、叫ぶ。

「おまえらあ！オダマキの依頼はもうどうでもいい！やることは一つ！そこの傍迷惑な魚に目にもの見せてやることだ！」

SＩＤＥＮの仇を取るため、カイオーガに特効するボウシ達：だが。

「ぜんつぜん効いてねえぞ！」

「二ードルアームも効いてない…!?」

「チツ！辻斬りが少し効いたぐらいみてえだな」

「あのカイオーガ：物理に強いのか…!?」

「どうすんだよミクリさんよお！あんたも手持ち全滅してこうやつて高台で作戦会議してるわけだけどよお！」

ルネシティで一番高い場所、ボウシ達はそこに一度避難して作戦會議をしていた。

「物理がダメなら特殊技…と言いたいが…」

「俺らで特殊が得意なのは…」

物理に偏っているこのメンバーの中ではＳＩＤＥＮは唯一、特殊向けの技を多く覚えていた。

「あいつが…居てくれたならあ。」

ポツリとボウシが呟いたと同時に、しごれを切らしたのかカイオーガが再度咆哮を挙げ、自らの前にエネルギーを集中させ始めた。

「おいおいおい」

「あれは…不味いぞボウシ君…あれは根源の波動…ゲンシカイオーガの最強の技だ！」

刹那

放たれた根源の波動は高台を粉碎し、咄嗟に飛び出したボウシ達は地面に勢いよくがんめんから着地した。

「いつつ…あんなの直撃したら死ぬつて…」

「そうつすよね…絶対に当たりたくないつすよ」

うつ伏せの状態のボウシはその声を聞いて顔を上げた。こじんまりとした身長、モヤシの様な肉体……そして

「ボウシ！ただいま！」

見慣れたアホ面…S I D E N がそこにいた。

「S I D E N…死んだんじや…」

「残念だつたなトリックだよ…じゃなくて、助けられたんすよ、あの人には」

S I D E N が指差す方向にはかつて川に溺れたS I D E N を助けたアブソルが居た。

「あいつは…」

「俺が鬱病だつたときに出でてきた…」

「アブソル！」

アブソルはボウシ達の方を少しだけ向き、静かに頷いた後、カイオーガに向けてサイコカッターを放った。

「頭のおかしなトレーナーよ！先の荒波の中其奴は自らの秘められた力を手にした！私が時を稼ぐ！その力を使うのだ！」
「S I D E N の秘められた力…？」

「ボウシ」

S I D E N はボウシに自らのメガストーン…ヤミラミナイトを見せる。

「アブソルの言つた通りだ、沈んでいく中、これが光つてたんだ…ボウシ！やろうぜ！」

メガストーンを握り締めボウシを見つめるS I D E N 、ボウシは静

かにその握り締めた拳に自らの拳をぶつけ、二ツと笑う。

「ああ！ やろうぜ相棒！」

負傷しつつもおやこドンは再びザルトヘルを掴み羽ばたく

俺も加勢してくる！頼んだぞお前ら！」

くれ！時間稼ぐんだ！」

「へつ！ 良いぜ！」

「今こそミサイル針の使い所さん！」

散開して持ち場に着く一同。

ボウシはメカバングルを構え、S I D E Nもまた腕を交差させて

ホーリー取る

れでるうううう！メガヤミラミ！ブラアアオオアツツツツ!!

光を放ち、胸の宝石が飛び出しその瞳を赤くしたヤミラミ…メガヤ

ミラミが、ここに爆誕した。

「あんま変わつてねえ！」

一青団子が變わりすぎたつたんだろうなあ…さて

「本當の戦いには…」

次回！決着！

根源と悪の激突

「今の俺は…誰にも負ける気がしねえ！」

「よーし！ S I D E N 、そのまま瞑想をガン詰みだ！」

「時間は俺らが稼ぐぜ！ 行くぞおやこドン！」

空からザルトヘルとおやこドンが、海から青団子とミロカロスを蘇させたミクリが、地上からうまま棒が、其々の役割を果たすために一斉攻撃を開始した。

「ベノムショック！」

「ロングレンジニードルアーム！」

「ハイドロポンプ！」

「波乗りい！」

四方向からの攻撃、しかしカイオーガにダメージが入っている様子は無い。

「俺とT M 革命はそもそもタイプの相性が悪いなこりや」

「青団子君、誤魔化しが雑だよ!?」

「俺に至つちやこれしか遠距離ねえんだよ！」

「（棘が）折れたあつ!?」

カイオーガはまずは目障りなうまま棒目掛けて再び根源の波動を放つ準備を開始した。

「あつ、おしめ…」

「うまあ！ 逃げろ!!!」

放たれた根源の波動、しかしそれはうまま棒に当たるよりも前に… ”突如して割り込んだ黒い影に直撃した”

「ふあ! ?」

「なにごと! ?」

「あの孤独なシルエット…間違いない…奴だ」

「やつ…?」

根源の波動で舞い上ががつた水が晴れると四足の足で大地を踏みしめ、物理的に水が滴る黒いポケモン…ブラッキーがそこにいた。

「ふふん…俺！ 参上！」

「ニアミ!?」

「ファツ!? いつの間に来てたんすかニアつちゃん!/?」

「おせーよホセ」

駆けつけたブラッキー…ニアミ＝アベ。

かつてボウシと共に旅をした仲間の一匹である。

「ミドラーから連絡があつてな、アイツを叩き起こしてきたんだ！」

ニアミが叫ぶと不思議とミロカロス、青団子以外のポケモン達に不思議と力が湧いてくる。

「おお…この昂る感覚は…」

「火力を上げたいからナイスタイミングつすよ…」

皆が空を見上げるとそこには闇が広がっていた…否、ただ一点のみ赤いYの様な模様が出来ていた。

その模様は突如急降下をし、カイオーラの目の前にその姿を現した。

「腹へつた」

命を食い荒らす破壊の翼…伝説のポケモン、イベルタルの姿がそこにはあつた。

「あれは…カロスに伝わる伝説のポケモン…!? どうしてここに！」

「俺は知らねーな、昔の仲間じやね?」

「お前ら…大遅刻じやゲロビ鳥い！」

「理不尽過ぎて草つすわ」

「そう言うなよ…カロスからイベルタルに乗つて来るのつて以外と辛いんだから…」

イベルタルの方に目を向けると執拗にカイオーラの頭に齧りついて応戦していた。

おい、技使えよ。

予想だにしない増援、たつた2匹だけだがそれだけで戦況はボウシ

達側に傾いた。

「瞑想ガン詰み完了！何時でも撃てますよ！」

「よつしやあ！S I D E N！悪の波動！」

S I D E Nの巨大化した宝石から放たれた黒い衝撃がイベルタルと取つ組み合いをしていたカイオーガの横つ腹を捉える。カイオーガは体制を崩し、海に沈んでいった。

「やつたか？」

「おうT M革命、フラグ立てるのやめーや」

刹那

海の中から既に根源の波動を放てる状態のカイオーガが飛び出してきた。

それもボウシとS I D E Nの目の前に。

「向かいうてえ！」

「言つたでしょ！今の俺は負ける気がしないって！」

ぶつかり合う2つの波動、端から見てもS I D E Nが押されているのは分かる。

「見てらんないねー！悪の波動！」

S I D E Nの横に滑り込んできたニアミリアベが悪の波動を放ち加勢する。

「腹が減ってるんだよおおおっ！」

同じくS I D E Nの横に飛んできたイベルタルが加勢する。

激しい波動のぶつけ合い……しかし次第にカイオーガのゲンシカイキが解けていき……やがて攻撃を止めた。

「撃ち方やめーい！」

「あつ、無理……もうこっちの体力ががが……」

メガシン力を解除して倒れるS I D E N、カイオーガもまたふらふらと左右に揺れながら海へ沈んでいった。

「……やつた」

「やつたぞおおおおっ!!」

こうして……カイオーガの騒動は幕を閉じたが……ボウシの褒賞金の大半はルネシティの弁償に宛がわれたのはまた別のお話

「はえーすつごい」

崖の上から勝利を喜ぶボウシ達を眺める女とゴニヨニヨがいた。

女は暫く様子を見た後、ボールからボーマンダを出して飛び去った。

「まさかカロスの伝説までくるなんて…なんなんだろうね彼等は」
女は気が付いていなかつた、戦いの最中、ザルトヘルとおやこドン
にその姿を見られていたことを。

彼らが再び会うのはまだ先のお話…

「イヤツツツツフオオオイ！今夜は焼き肉つしょー！」

当然の「ことくボウシ達はそんなこと知るよしもなかつた。

予告でアクア団…あつ（察し）ふーん

カイオーガを倒したボウシ達、そんな彼らの前に…
野生のアオギリが現れた！

「よくも邪魔してくれたな…この俺が相手にな」

「チエストオ！」

ザルトヘルの毒づき！ アオギリは倒れた！

「「知つてた」」

「顔出ただけマシ」

「とは言えメインの敵であるアクア団が雑に解散とか草も生えないつ
すね」

今日も今日とてやりたい放題のボウシ達、アクア団壊滅やカイオーガ撃退の功績を讃えられ、ポケモンリーグに招待された。

現在は専用のクルーザーでポケモンがを目指している途中、とりあえず全員を連れていき戦うメンバーを考えていた。

「とりあえずポケモンリーグに直行出来るし大誤算ともすぐ戦えるみたいだしなー。」

「あの石野郎を殴れるならなんでもいいぜ！」

「お腹すいた」

「まあ流石にチャンピオンが相手だと今までの様に雑に殴つて勝てるとは思えないけどな」

「しかも俺と団子のどっちをメガシンカさせるかで展開も変わるだろうしどうなるかねー」

「お腹すいた」

「鋼使い：飛行タイプの私はあんまり役割無さそうね」

「んなこといつたらあたしだつて役割ねえつすよ姉さん」

「お腹すいた」

「俺も毒ドラゴンだし、火炎放射だけじや役に立てるか怪しいしなー」

「私はばかちからあるけど…子供の面倒も見ないといけないしね」

「お腹すいた」

「ニアつちゃんは早々に帰つたし、どうするかねー」

「(無言のデスウイング)」

「やめろイベルタル」

「飯なら作つてやるから大人しく座つてろ！だあーもう周りの生命を吸うな！害鳥！」

「やあ、よく来てくれたねボウシ君」

ポケモンリーグの入口で大誤：ダイゴが出迎えてくれたが青団子は今にも殴りかかるとしている。

「まだだつ！まだだつ！」

「ステイツ！ステイツ！」

「あのラグラージは元気だね、さて本来なら四天王と戦つてもらうんだが…」

「8割りはあんたのせいで元気なんだよなあ…そんで四天王がなにか？」

ダイゴは一度ため息をつくとボウシの顔をしつかりと見て告げた。

「全員 インフルにかかる？」

「ばつかじやねえの？」

とりあえず二日後には出勤出来るそうなのでそれまでの間はポケモンリーグの客室で寝泊まりをしつつチャンピオンロードで修行することとなつた。

「5月の新パックかな？」

「あれ、ハツサムGXは来るとして他のパッケージ連中がどうなるかわかんねえよな、既にGX二枠決まつてるし」

S I D E N とうまま棒が話してゐるのをスルーしてボウシ達はチャンピオンロードへ向かうのだつた。

ミツル君と入れ違いになりながら。

「レベルを上げるためのRTAはつじまるよー」

「はいこ→こ←ガバ、再走して」

「茶番してないで戦いなさいよ（鋼の翼）」

出口付近に屯しつつ、訪れるトレーナーを倒し続けること数時間……。

「ぬわああああん疲れたもおおおおおおおん」

「殺すぞ」

「姉御が辛辣過ぎる」

「今に始まつた事じやねえだろ」

「と言うかバンこちゃんが然り氣無く進化してるせいでザルニキの腰がヤベーんだけど誰もつっこまないの？」

「パパー！進化したよー！」

「サナギラスになると抱っこすらキツい…歳だな…俺…」

「バンギラスになつたらお前死ぬんじやね？」

そんな感じで何時ものようにポケモンセンターへと向かうのだった。

「他の挑戦者来ないね…エルレイド」

「何か俺ら大事なフラグを立ててない気が……まあいいや」

次回は遂に四天王との戦いだ！続く！

この作品の次回予告に期待するなつてハツキリわか
んだね

「いやあ四天王は強敵でしたね…」

「ちくしょうやりやがったぞコイツ、まさかのゲンジ戦すらカツトと
きた」

何時もの出だしてチャンピオンの部屋の前に立つボウシ。
だつてしまふがいいね！フヨウ以外は青団子単機みたいな有り様
だつたからね！

「この面子でゴーストタイプに苦戦するのがあり得ねーよwww」

通りすがりのミミツキュGX 「せやろか」

「なんすか今の」

「突然現れてクソリープするやつ」

「よっしゃあ！やつとあの野郎をぶん殴れるぜ！なあ！デデ太郎！」

「まつたくンネ！やはりエモンガは糞ンネ！」

「心の中にデデカス飼うのやめろ」

「アニメのデデンネも1年と少し前があ…時の流れはフツシェイダネ
ダーネ…」

「それ伝わる？」

「一方その頃ダイゴは…」

「……ゲンジから連絡来てから一時間は立つたけど来ないな…
まあ、逃げはしないだろうし待とう。」

「あたしは思うの、確実にトリトが同僚に穴を掘るされるイラストと
かブツクス！が描かれるって」

「はたしてゼラオラとどつちが餌食になりますかね…」

「おう、糞鳥にS I D E N 読者厳選やめろ、俺は健全な作品をだな」

「はつ？」「ファ！？」「あつ？」「ハツ？」「えつ」「んー？」

.....

ボウシは咳払いをすると部屋の扉の前を向き。

「これも全部…大誤算つてやつのせいなんだ」

「うーん、この責任転嫁」

「当たり前だよなあ」

「このゴリラは大誤算歟のことしか考えてねえな！」

ギイイイ

「……やつと来たね！待つてたよ！」

扉を開けるとそこにはやる気に溢れてる大誤算がおりました。

「くたばれやゴルアツ！」

青団子のアームハンマー！

ダイゴは躲した！

「ちよつと！元気なのはいいけどまだ始まつてないから！」

思ふ、ぬタグロヌダ。

「ボケモジバル約こまち

「…よし、ならばバトルだ！ルールは6V S6！最後に手持ちが残つ

てた方の勝利だ！」

「これが最後の戦いだ！ いくぞテメエら！」

「ぶん殴る！」

「タイプ的に俺は役に立てねえな」

「俺もまあメガシンカの粹は団子に譲るしかねーからな」

「雪崩とかエツジとか持たれてたら死ぬわ」

「草が鋼に勝つの辛くね？」

「見学ー！」

「ハアツ~~~~~! つつかえ!」

「しようがないね♂」

「まつ、何時ものノリで戦えやいいんだよ！」

「さあ…始めようか！ホウエンでもつとも強いトレーナーを決める戦いを！」

そして…チャンピオンを決める戦いの幕が開く…。

剛腕インパクト

これまでの悪だら！

色々あつて（ジム倒壊、爆破諸々）遂にチャンピオンの元に辿り着いたボウシ達！

今、チャンピオンの座と青団子のプライドをかけた戦いが始まる！
チャンピオンのダイゴが勝負をしかけてきた！

チャンピオンのダイゴはエアームドを繰り出した！

「いけつ！ エアームド！」

「飛行には飛行だ！ まずはおやこドン！ 行つてこい！」

「飛べるつて点以外を見てないの？ まあいいわ、電磁波！」

「痺れますよねえ！」

「そんな…！ 素早さで負けたのか… いや違うつ！ あれは…；”せんせいの爪”？」

「爪ドンカラスはこれだからやめられねえぜ、おやこドン！ 辻切りだ！」

おやこドンの辻切り！

急所に当たつた！

「このままじやダメだが… ここはエアームドに耐えてもらうしかない」

「ずっとあたしのターン！」

幾度となく痺れているエアームドに繰り広げられる辻切りによつてエアームドは地面に墜落し、氣絶した。

「…お疲れ様、行つてこい！ ボスゴドラ」

「ボスゴドラGXまだですか」

「うわ… 固そうなの来たわね… でもこつちには爪電磁波が…」

おやこドンの電磁波！

ボスゴドラには当たらなかつた…

「…」無ゾ

おやこドンの諦めの言葉と共に地面からストーンエッジがおやこドンの腹部に直撃し、そのまま天井へと叩き付けられた。

「あつ、姉さんつ!?

「おやこドンがやられただと…腐つてもチャンピオンつてことか…」

「ボウシイ! 次あたしが行く! 野郎ぶつ殺してる!」

「負けるやつの台詞やめろ、よし行け! うまま棒!」

「おいおい、こんな貧弱縁なんて1発で踏み潰しちまうぜ HAHAH A!

「彼女は瑠璃ではない（無言の爆裂パンチ）」

笑つて いる隙に繰り出された爆裂パンチはボスゴドラの鳩尾を綺麗に捉える。

しかし伊達に高いステータスを持つだけあつてか、一撃とは行かなかつた。

「ああ…頭がグラグラする…貧弱縁なんて言つて悪かつたな…全力で潰してやラア！ アイアンテール！」

訳もわからず自分を攻撃した！

「うーん、これは草、食らえ！ 瓦割り！」

ボスゴドラの頭に振り下ろされた瓦割りによつて、彼の意識は閉ざされた。

「あつぶねえ…死ぬかと思つたわ」

「はあ…ボスゴドラもダメなら…行つてこい、アーマルド！ シザークロスだ！」

「FF外から失礼するゾ～」

アーマルドのシザークロス！

効果は抜群だ！ うまま棒は倒れた。

「うげえ、虫つすよザルニキ、どないしましょ」

「間接的にデイスるな、ここからは青団子に任せんしかねえ」

「そういうわけだ…行つてこい！」

青団子は静かにステージに降り立つた。

スポットライトがステージを照らす。

目の前には自らを貶めた男が立つて いる。

言い掛かりと言われたら そ うだとは自覚して いる。

それでも…構わない

その想いで…あなたは”決意”に満たされた

「うーん草あ！」

アーマルドのシザークロス！ 青団子には当たらなかつた！

「……ふんっ！」

青団子の滝登り！ アーマルドは倒れた！

「……」

「いやー、決意キマッてんなあ」

ダイゴは青団子を見て考えた。

ユレイドルなら可能性があるがあのラグラージはナギのチルタリスを再起不能にする程のアームハンマーを使ってくる、ネンドールは論外。

そうなると…大人しく彼の要望に答えるべきだらうと。

「…君の望みに応えよう！これが僕らの全力さ！行け！メタグロス！そして…」

「進化を越えろ！ メガシンカ！」

現れたのは四本の腕を持つ鋼鉄。

メガメタグロスは青団子を目視するとその腕を弾丸の如く放つてきた。

「ちつ！バレットパンチか！避けろ！」

「残念ながら…腕はまだあるのさ！」

連續して放たれた拳を回避できず、バレットパンチによつて青団子は壁に叩き付けられた。

「逃しはしない！メタグロス！思念の頭突きだ！」

青団子に行動を許さない様に壁にめり込んでいる青団子へ追撃が行われる。

壁はその激突で大きなヒビが出来上がつた。

「おいおいおい、嘘だろ…青団子が負けるなんて…」

「（…少し大人げなかつたか…なぜボウシくんは余裕で腕を組んで…つ!?）

「残念だつたな…”既に手は打つていたのさ！”カンコーン！」

壁に突き刺さっていたメガメタグロスが次第に押し退けられてい
く、そして……彼はその姿を現した。

「筋肉……マックス……大変身だ……ゴラア！」

「あの一瞬でメガシンカだと！だが下の腕に気を取られ過ぎだ！コ
メットパンチ！」

「ただ押し返してただけに見えたんなら……お前さんはアホだな……自分
の体勢を見てみろ！」

「何……まさか……メタグロスを地面に埋め込んでいるのか!?」

「穴を掘る」のさ！お前でなあ！アームハンマー！」

「こうなつたら……ギガインパクトで飛び上がれ！」

振り下ろされた拳を弾くようにメガメタグロスがギガインパクト
で上昇する。

青団子がジャンプしても届かないであろう高さへと上昇し、反動で
動けない体を休めようとした。

「おいおい、お前さんはアホだな、届かねえなら届かせりやいいんだ
よお！」

「その通りだ！やれ青団子！滝登りだ！」

足元から水を出現させ水流を纏つた突進をメガメタグロスの真横
に目掛けて放つ青団子。

突然の出来事と反動でメガメタグロスは対応できず動きが止まつ
た。

「今こそ振り下ろしやがれ！最大級の……」

「アームハンマーだあ！」

部屋に響き渡る打撃音。

メガメタグロスの頭頂部に振り下ろされた剛腕はメガメタグロス
の意識を奪うのには充分だ。

「そう……充分なのだが……」

「追撃のおー・ギガインパクトオ！」

このゴリラは止まらない、何処かの誰かが止まらなかつたように。
落下するメガメタグロスに追い撃ちをかけて放たれたギガインパ
クト。

当然のごとくメガメタグロスは更に加速して落下した。

ダイゴ目掛けて。

後にダイゴは語った。

「無自覚に恨みを買つてしまつた場合……痛い目を見る前に話し合いなどで解決をするべきだ」と。

「チーン

「や つ た ゼ」

「あーもう、めちゃくちゃだよ」

「おーい！ボウシ君！試合はどうな……ナニコレエ」

駆けつけたオダマキが見たのはメタグロスに押し潰されたチャンピオンとその上で右腕を高らかに上げている自分の研究所生まれのポケモン。

そしてFXで有り金を溶かしたかの様な顔でそれを見ているボウシの姿であった。

エピローグ

チャヤンピオン（仮）の誕生は別にホウエンを震撼させず、どちらかと言えばダイゴの入院で過激派のファンがミシロの実家を襲撃する案件になっていた。

「まあ俺らはトクサネに引っ越してるんだけどなあ！」

「お袋さんがまーた過激派にスカイアッパーぶちこんで入院させたつてよ。」

ここはトクサネシティ、そしてその外れに位置する喫茶店「帽子屋」ボウシ達は稼いだ賞金を元手にいそいそと開店準備を進めていた。

「パパー遊んで！」（突進）

「逆に曲げれば治るだろ」「につ・ニキの腰がつーーーーー！」

「ブゲエ」（人間年齢40代の腰に訪れる激痛）

ザルトヘル、うまま棒、青団子、バンこ、ボウシは店の掃除やレイアウトを。

おやこどん、SIDEN、イベルタルは宣伝の為のチラシをばら撒きに。

ミドラーとカルロは市場の人と話をしに各自のやることをしていた。

カラソコロンとドアが開く。

フードを被つた見慣れない姿の人間がそこに立っていた。

「あ？・ああ、客かい・イテテ悪いけど開店は明後日からだ」

人間はザルトヘルの言葉を聞いてないのかズカズカとカウンターを拭いているボウシに歩み寄る。

「お？なんぞ…」

人間はフードを下ろしその顔を見せる。

日に焼けたのか自前なのか、褐色の肌。

そして美人にカテゴライズされるであろう容姿の女性がそこにいた。

「……キミのメガバンブル貰うよ」

その瞬間、女から繰り出された拳がボウシの鳩尾を捉えた。

「彼女は瑠璃ではない（無言の腹パン）」

「えつ…この人殴られながら何言つてるの…」

事態を見ていた周りもざわつく。

「おい見てみろようまま棒、あの女多分マトモな人だぞ、ボウシの発言に困惑してるし。」

「んまあ確かにシンプルに引いてくるのは珍しいっすね」

「言つてる場合か！やろう、何しやがる！」

香氣に話す二匹を尻目に女に辻斬りを放つザルトヘル。

しかし、扉を突き破りガチゴラスが突如として乱入してきた。

「なんだこいつ!?」

「キィーテオドロケエー!!」

ガチゴラスは雄叫びを上げながらザルトヘルに突進し、吹き飛ばした。

「ゴベエア」（人間年齢40代の腰に再度訪れる激痛）

「ごめーんね？でもこれって大事な使命なんだ…後でちゃんと返すから…じゃあね！」

そう言いガチゴラスに飛び乗つて逃亡しようとする女…だつたが。「さてはオメー化石だな？」

ガチゴラスの頭上に青い筋肉の塊が飛び降りてきていた。

「なつ…！ いつの間にメガシンカを!? メガバングルは取ったのに…」「ところがどつこいそいつあメガバングルじやないぜ！」

フラフラと立ち上がるボウシ、そしてガチゴラスの頭に着地して顔を床に叩き付ける青団子。

「よーく見てみろよ…そいつあメガバングルじやなくて…昼飯にしようとしていたチョコドーナツツだぜ！」

「なつ！ いつの間に!?」

「ハハハ…アーッハツハツハ！ すり替えておいたのさ！」

女を指差して笑ううま棒。

「くつ…でもこつちにはガチゴラツウォツ!？」

ガチゴラスが居る…そう言おうとした矢先に突如ガチゴラスから

振り落とされる。

何故か、理由は簡単だ。

ガチゴラスがメガラグラージにヘッドロックされて店の外に引摺り出されているからだ

「ガツ！ガチゴラス！」

「おいおいおい」

「死んだわあいつ」

「くそ：腰が痛くて動けねえ…」

「大丈夫？」

この日、ダイゴは一時退院をしていた。

あまりにも長期の入院のため一度家の様子を確認して戸締まりなどをするためだ。

「着いてきてくれてありがとうフヨウ」

「だつてアタシかカゲツが居ないとダイゴくんたらつすぐにヨノワールとかフワライドに連れていかれちゃうでしょ？」

四天王の一人、フヨウが付き添いとなつてこのトクサネへ帰つてきた。

「とりあえず彼らに鉢合わせる前に済ませないとな…」

そして…そんなダイゴ目掛けて茶色い何かが飛んできた。

ダイゴは持ち前の化石知識を生かしてその一瞬でその物体が何かを悟つた。

それはガチゴラス。

そうガチゴラスだ、化石ポケモンの。

「いやあー、丁度良い的があつて助かつたわ。」

引摺り出されたガチゴラスは青団子によつてジャイアントスイングされ……ダイゴ目掛けて”投げ付けられた”のだ。

「くつ……キミから奪い取るのは無理みたいだね……なら…逃げさせて貰うよ！」

女は胸元から煙玉を取り出し床に投げつける。

「ちくしょう！シンプルな手を使いやがつて！やるならマルマインの自爆に隠れてとかやれよ！」

「なに言つてんの!? つてガチゴラス!? ちょっとなんでチャンピオンの上で氣絶して…あつ、違うんです私の手持ちだけどやつたのは私じゃなくて…」

煙が晴れると何故か女が壊れた扉の前で息を切らして立つていた。
「ゼエ…ゼエ…あの四天王の娘怖すぎでしょ…キミ達の事は忘れないよ…私の使命を邪魔したキミ達はね！」

女はモンスターボールからボーマンダを出し、飛び乗る。

「私はヒガナツ！流星の民の後継者、この星を救う使命を持つ者よ！特にそこのラグラージ！チャンピオンに死体蹴りしてるのでラグラーージ！ガチゴラスの仇はいつかとらせて貰うよ！」

「あ？…うるせえこちとらチルタリスやらメタグロスやら殴つてきただ今更人間一人殴ることに罪悪感なんざねえわ」

「ヒガナつて言つたつけ？その高さだとこのゴリラ届くから逃げるならはよ逃げた方がいいぞー」

「…………いや本当になんなの？キミ達」

そう言いヒガナと名乗る女は何処かへ飛び去つて行つた。

「あー、腰が痛てえ…なんなんだあの女は」

「わつかんねえな、とりあえず皆が帰つてきたら話すか…」

「その前に……」

「ぬおおおおつ！頑張つてゴルーグ！あなたが倒れたらダイゴくんを守れない！」

「邪魔だあ！泥人形！」

「あのゴリラ止めないとなあ…」

謎の女、ヒガナ。

そして彼女の言う使命とは！って思つたけどこれ読んでる人たち
はだいたい知ってる情報だつたわこれ。

そう言えばソライシ博士とか隕石ガン無視してたわ

その日、ホウエン地方を始めとした各地方が騒然とした。

巨大隕石がホウエン目掛けて落ちてくると、トクサネ宇宙センターが発表したからだ。

この事態に対しデボンコーポレーションは転移装置の開発を急ぎ、隕石の衝突を回避させようとするのだが……

ドンツ！

「ホゲエ！」

トクサネ宇宙センターは何者かの襲撃で荒らされ、転移装置が破壊されてしまった。

「……そして、その犯人がボウシくん」

「君の所にやつて来たヒガナつて女なんだ。」

「ほーん」

喫茶店、帽子屋。

そこにはオダマキ博士がボウシに今起きてる事態を話しにやつてきていた。

「真面目に聞いてくれ……これはホウエンだけじゃない！ 地球の危機なんだ！」

「いや、地球の危機を人間だけでどうにかしようと考えてるからダメだろ。」

「まあ科学にも限界はあるしな」

ボウシの隣で真面目に聞いていたザルトヘル、彼はそもそも人間だけはどうにかしようと考えてることに不満があるようだ。

「別の時空に転送すれば確実に助かる、だから対策本部はその手段を選んだんだがね……ヒガナはこう言つていたらしい」「転送先の世界の事を考えないなんて……想像力が足りないよ」”とね

「…別の時空ねえ、ボウシ」

「あー、ニアつちやんがその手の話に詳しいけどアイツ、また何処かに出掛けちまつたからな」

「どうせナンパじゃないかしら、はいサイコソーダ」

トレーにサイコソーダを3本乗せたカルロがやつて来て三人の前に置く。

「…対策本部としてはソライシ博士と再度転送装置の開発をするがヒガナの動向も気になる」

勢いよく立ち上がるオダマキ

「ボウシくん！君にはヒガナの行方を追つてもう！因みに拒否権は無い」

「うわあ、真っ黒ですわあ」

「まあ、大誤算が入院している原因是こっちにあるしな、とりあえず調べに行くか」

「パパー！お出掛けするの？」

準備をするボウシとザルトヘルの前にサナギラスが転がつてくる。
「ああ、バンニ。この間の店を荒らした奴を探すことになつてな、サナギラスになつてから不便で仕方ないだろ？が店でカルロ達と待つてくれ」

「はーい、お土産よろしくね！」

そう言うとゴロゴロと店の奥へ転がつっていくバンニ。

「よし、ザルトヘル、おやこドン、青団子、ミドラー後SIDEENは：
あー、オーロットに埋められてるから後で拾わないとな、とりあえずヒガナを探しに行くぞ！因みにSNSで足取りは追つたぜ！」
「かがくのちからつですげー」

「あらあ、私を雑用するとか言つたら啄もうと思つたのに」「草」

「…にしてもボウシ、何での女は転送装置を壊したんだろうな」「さあ、アイツ自身が別の時空の人間だつたりしてな」

「おいその設定1作早くないか？」

「メメタア」

「メルタアン」

「ゲッコウガア…」

「おい、何か混ざってるぞ」

夢を見た

白い何かに吸い込まれる夢

流星の滝に流れ着く夢

”

”と出会った夢

そして…あの日の夢を

「ママー？」

「ん？ああ、おはようシガナ…行こうか…空の柱に」

巨大隕石衝突まで残り1週間

悲壯の翡翠

12年前、流星の滝上空にて謎の光が出現した。

警察は流星の滝に住む竜の民達が何かしらの行事を行い、その光が漏れたと言う見解を公表した。

その日、竜の民達は困惑していた。

空が割れ、そこから年端も行かぬ少女が落ちてきたからだ。

「あの切れ目、我らの伝承には一切の記述がない…」「一体あの娘は」「その事だがおばば様、私は以前ホウエン以外に我らの同胞を探す旅をしていましたが…」「あれ」に似た物を見たことがあります」

一同はざわつくが、長であるおばばと呼ばれた人物が諫める。

「それについて話すがよい」

「はい、あれはアローラ地方という4つの島々からなる地方を巡つていた時です、アローラにも様々な伝承がありその1つにあの裂け目の事が書いてあつたのです…そして規模こそは小さいのですが実際に私もこの目で見ました」

「アローラだつて…?」

「ホウエンよりも温暖な場所だよな…」

「何でそんなところの現象がこっちでも…?」

「気になつた私はその裂け目について調べたのですが…どうやら異なる世界のポケモンや人が落ちてくる事もあり…つまりあの少女は」「異なる世界の者か…身寄りが無いのなら致し方無い、あの娘を竜の民として迎え入れる事も視野に入れよう」

おばばが辺りを見回すと皆、異論はないと顔で示していた。

「今は確か…歳の近そうなシガナが見ているのだつたな?」

「ええ、目覚めたときに歳の近い方が話しやすいと思いまして…待てよ異なる世界の者なら言葉は…」

沈黙が辺りを包む、おばばもそれは考えていなかつたとばかりに煙草を吸つて誤魔化す。

すると向こうから件の少女の手を繋いだ少年が歩いてきた。

「おばあ様！ヒガナの目が覚めました！」

「シガナか、ん？ヒガナとはその娘の名か？」

ヒガナと呼ばれた少女は少し緊張した様子で辺りを見回す。

「私…ヒガナつて言います、流星の滝に暮らしている竜の民…なんですか？」

自分の知っている流星の滝ではない。

その目はそう語つていた。

「…ヒガナよ、いきなりこんなことを言われても理解できぬだろうがお主は異なる世界から”何か”あつてこの世界へ迷い混んだのだ：まさか異なる世界の同胞だとはな」

「てことは迎え入れなくとも同胞だつたのか！安心だな」

「とりあえず勝手が違うだらうから皆で色々教えていこうね」

竜の民達は突然の新入りを拒むことなく受け入れた、ヒガナは静かに頭を下げ、感謝の意を示すのだった。

そしてヒガナは竜の民に迎え入れられた。

時は流れ、ヒガナとシガナは互いに17歳と19歳になつていた。二人はとても仲睦まじく、来年、シガナが20になつた時に正式に婚約する事が決まつていた。

「ねえ、シガナは本当に伝承者になるの？」

ヒガナはシガナに寄り添いながら疑問を口にする。

「ああ、俺は珍しく外の世界と関わらなかつた若い民だからな、より期待されてるんだ…今さら断るつもりもないさ」

「…私もね、元の場所だと伝承者…の予定だつたんだ」

「でもヒガナの所の伝承者つて」

ヒガナは静かに目を閉じる

「うん、伝承の語り部として死ぬまで流星の滝から出られない…こつちとはかなり違うね」

シガナはそつとヒガナを抱き寄せる。

「…お前があの裂け目からこつちに落ちてきて…俺は良かつたと思つてる」

「…私もよ」

そして、月日は流れ…二人は正式な夫婦となり、暫くたつたある日。

「てえへんだ！シガナ！馬鹿野郎訓練は後だ後！」

竜の民の一人が慌ただしくコモルーの訓練をしていたシガナの元に駆け付ける。

「えつ！ちよ…コモルー！少し待つてくれ」

「おけおけ、いてらー」

引き摺られながら家に戻るシガナ、そして家に入るとヒガナがベッドで横になり医師が様子を見ていた

「先生!…まさか何か病気に…？」

「いんや逆だよ逆…おめつとさんシガナ、妊娠だよ」

「…シガナ、これからは自分だけの身体じやなくなつちやつたね」

幸せな時間、ヒガナは確かにそれを噛み締めていた。

しかし…あの日はやつてきた。

あの忌まわしき星墜の日が。

その日、竜の民達は慌ただしかつた。

そもそもそうだ、小型の隕石が里の近くに落ち、ドラゴンポケモン達が混乱して滝の中で暴れまわっているからだ。

「シガナ！」

以前よりも少しだけお腹が大きくなつたヒガナがボーマンダに跨がるシガナの元へ駆け寄る。

「ヒガナ！危ないから家で待つてくれ…ドラゴン達は驚いてしまつてるだけだ、皆の力を合わせればすぐに收まる。」

そう告げるなりシガナは飛び立つてしまつた。

シガナの宣告通りドラゴン達は落ち着きを取り戻しシガナも怪我無く帰ってきた、そこここまで。

ここまででは何の問題もなかつた。

ヒガナは里の入り口で暴れるドラゴンポケモン達に怪我を負わされたポケモンの手当をしていた。

「いたいンゴ」

「はいはい……えーと、ルナトーンだからこっちのが良いかな…………よし、大丈夫」

そしてポケモン達が掃け出した頃、里の入り口に二人の男がやつて来る。

「やあ、あなたつてここの人かな？」

男の片方はカメラを手にしていて、そのカメラで里を撮影していた。

「ツ!?」こは竜の民の里よ！余所者は出ていきなさい！」

男を睨み付け立ち去るように促すヒガナ。

しかし男はニコニコと笑みを浮かべる。

「いやあー竜の民は怖いね、まさかドラゴン達を暴走させるなんてなんて凶悪な民族なんだろ！おい！カメラ回せ！」

ヒガナはシガナと違い定期的に滝の外で買い出し等を行っていた。だから知っている、コイツらは他人を餌に飯を食べる奴等だと。

「やめろ！」

やや重たい身体でも男からカメラを奪い取ろうとするヒガナ、しかし男はそれを避けてヒガナの背中を押す。

ヒガナの正面には崖、里の中なら柵が設置されているがここは里の入り口から出たところ。

掴めるものはない、崖から落ちるヒガナの目にはいつたのは全速力でこちらに走つてくるシガナの姿だつた。

「ツ……ヒガナ！」

崖から飛び降り、落下するヒガナを抱き止めるシガナ。

下は川……だがシガナは理解していた、あまり深さが無く、ゴツゴツとした岩が多い場所であると。

「ヒガナ……ありがとう」

ゴツ！

「……えつ…………あれ……？シ……ガナ？ねえ、起きてよ……ねえ、嫌だよ……な
んで？……何で頭から血が……あつ、うつ」

朦朧とするヒガナ、そして……腹部に強烈な痛みが走り……意識を手
放した。

ヒガナが目覚めたのは翌日であつた。

目覚めたヒガナに告げられたのはシガナと……子供の死。

ボーマンダはヒガナを責めなかつた、むしろ己が駆け付けるのが遅
かつたから二つの命を救えなかつたと。

「……何でなのかな……ははつ、もつと色々考えて……こうなる可能性と
かもつと……もつと考えていれば……ははは」

「想像力が……足りないよお……！」

それからヒガナはシガナがやつてきた仕事を全て引き受け、こなし
てきた。

まるである悲劇を忘れようとするかの様に。

龍の民達は彼女が回復しつつあると思つていた。

そんな希望は打ち砕かれた。

「よしよし、いいこだねシガナ」

ヒガナの心は壊れたままだつた、迷子のゴニヨニヨに夫の名前を付
け、子として育て出したのだ。

そしてある日「龍神さまを呼び起こしてくる」
そう告げ里を去つた。

そして現在、ヒガナは目的のためにメガストーンを強奪し続けてい

た。

そして…遂に再びボウシ達と対峙する。

S I D E N 死す

「おー…いえいえいえい！、ふざけんなよ何なんだよ前回と前書きは！」

「どうしたS I D E N、頭でも打つたか？」

ヒガナを探して目撃情報を辿るボウシ達。

そんな彼らは数日前ヒガナが暮らしていた流星の滝を訪れその過去を長である老婆から聞いたのだつた。

「何かナレーターも捏造してないかしらあ？」

「まあ尺もあんまりないし同じ回想をやるわけにもいかないしな」

そして現在……デボンの流した嘘の情報で釣ると言う方針に変え、目的地であるヒマワキシティへとやつて来ていた。

「懐かしいなヒマワキ…思えばあのくそつたれに煽られたのもこの辺だつたな…」

「青団子、てめえはまずジムリーダーに謝れ」

ヒマワキシティはある事件以降ジムリーダーが精神的なダメージが大きくなりジムは休止。

挑戦者も訪れることが無くなり以前よりも寂れていた。

「まー、とりあえずヒガナが釣られるまであのツリーハウスで待機つて事になつてるから行くか」

待機場所のツリーハウスに入る一同。

青団子やおやこドンは寛ぎ、S I D E Nは窓から辺りを見張り出していた。

「ええ…団子も姉御もやる気出してくれよ…」

口では愚痴を溢すがしつかりと見張るS I D E N。

いつも以上にやる気のない2匹であるが青団子もおやこドンもヒガナの過去を聞いて以来やや消却的になつていた。

それはザルトヘルも同じだつた。

彼も大切な存在が己のせいで亡くなる苦しさを知つていて。

故に何がなんでも意思を継ぎうと躍起になる気持ちも理解できた。

青団子は別に誰かと死別した事はない。

ただ、前のようにヒガナの手持ちを殴れるかと言われたら……彼は少しだけ躊躇するかもしれない。

同時刻、ヒマワキ上空。

「うーん……これはもしかして罠つてやつかな？」

ボウシ達がツリーハウスで待機する中、ヒガナはヒマワキ上空を巡回して様子を伺っていた。

デボンがヒマワキに科学者集め隕石破壊の新計画を練ると言う情報入手し、やつてきたのだ。

「……時間稼ぎつてやつかな？……どうしたシガナ？」

「ママー」

シガナがヒガナを呼びながらあるツリーハウスを指さす。

「……成る程、流石シガナえらいぞおー！……じゃあ先制攻撃させてもらうよ！」

「んー…陸路じゃ来ないのかな」

「当たり前だろ、空でも見とけ、空でも」

青団子の適当な返事を聞き入れ空を見上げるSIDEN
彼の目には

まっすぐ自分めがけてドラゴンダイブを放つボーマンダの姿が映つていた。

「フア!?みんな伏せろ！」

「あつ？」

「どういうこと

一同が声につられ振り向くと、そこにSIDENはおらず……

「お前に恨みは……まあ無いが死んでもらうぞ」

その口いっぱいに破壊光線を貯めているボーマンダが居た。

「ちつ！ S I D E N ! メガシンカ……嘘だろ」

「おいどうした！」

「S I D E N の……S I D E N 靈圧が……消えた……」

「何……だと？」

「返事がない。」

目の前にあるのはツリーハウスの残骸。

確実に仕留めた、ヒガナはそう確信する。

「行くよボーマンダ、早く空の柱へ——」

まだ警戒しているのかと思つた途端、ボーマンダの体がグラリと倒

れ出す。

「えつ、ちょ！ 飛び降りるよシガナ！」

シガナを抱えボーマンダから飛び降りるヒガナ。

「つたくよお、不意打ちとはやつてくれるじやあねえか」

横に倒れたボーマンダ越しから声が聞こえてくる。

その声の主はボーマンダを持ち上げるところを睨んできた。

「メガラグラージつ！」

そこにいたのは破壊光線で消し飛ばした筈の青団子の姿があつた。

「いやー、穴を掘る忘れさせないでよかつたわー。」

そんな青団子の後ろから土まみれのボウシと

「たく、コーストじゃなかつたら死んでたぜ！ よくもやつてくれたな
！」

ドラゴンダイブで始末した筈のS I D E N が居た。

「……何で、何で邪魔をするのさ！ 私はシガナの意思を受け継いで指名を果たそうと！」

「手前が命賭けてまで指名を果たしたとしてだ、あの世のシガナってのは喜ぶと思つてんのかよ」

ザルトヘルが葉巻を咥え、青団子の後ろから出てくる。

「……、れしか無いんだよ……私には……彼も……あの子も失つた私には

！」

ヒガナはそう叫ぶとボーマンダをボールに戻し別のボールからフライゴンを出し、飛び乗る。

「私はこの命を捨ててでも指名を果たす！例えレックウザが抗つても私には…これがある！」

懐から取り出したのはかつてボウシがスルーした隕石と…マスター・ボールだつた。

「私は…必ず悲願を果たす…その為に生きてきたんだ！フライゴン！竜の波動！」

「S I D E N！悪の波動！」

「きーみーの一な一波つー！」

フライゴンとS I D E Nから各々放たれた2つの波動がぶつかり合う。

やがてその衝撃で爆風が置き、舞い上がった砂がボウシ達の視界を遮つた。

「あんにやろ！逃げる気だな！青団子飛べ！何かこう滝登りとかで！」

「無茶言うなポンクラ」

「ならおやこドン！お前なら」

「嫌よ、迂闊に飛び出たつてやられるだけだもの」

「言い争つてる場合か！行き先の目星はあんだろ!?」

やがて砂煙が止み、視界が戻るとヒガナは既に居なかつた。

「こうなつたらもう大誤算の言つてた所に向かうしかねえな…」

「行こう、ボウシ：空の柱へ」

「おう！とりあえずヒガナ落ち着かせて隕石をどうかしねえとな！」

「ダメだこいつノープランだ。」

次回！アルファサファイア編クラスマックス！

親方！空からキユウリが！

「うおおおおおおおつつああああああ！」

ヒガナを追つて空の柱を目指すボウシ達。

彼らは今、青団子の波乗りで海を渡っていた。

「潮風が目に染みるう！」

「いや、ゴーゴーゴーグル付けとけよ」

「ん？…おい！お前ら上見ろ上！」

泳いでいる青団子の声に釣られ見上げる一同。

その先には空の柱と：

空の柱に降り立つ緑色のポケモンの姿があつた。

「どうして！どうしてメガシンカしないのよ！」

空の柱をロッククライムでかけ上るとヒガナが緑色のポケモン
：レツクウザに掴み掛かっていた。

「いやさあー、私もね？お願いを聞いてあげたいのは山々なんだけど
ね？ちょーとお腹壊しちやつてその程度の隕石だとメガシンカ出来
ないんだわー、つらいわー」

「カイオーラと違つてくつそノリ軽いの草」

「伝説つて何でしたつけ」

「ベツちやんだつてただのデカイ鳥なのに伝説だからな…」

「！…もう来たんだ…だけどもうレツクウザは私が捕まえたのよ！
さあ！早く！早くメガシンカしてあの隕石を！」

「いい加減にしやがれ！」

突如ザルトヘルが怒声が響く。

あまりの衝撃にシガナはひっくり返りSIDENは気絶した。

「死んだ夫の無念だあ！その為に他所を巻き込んだあげく事態を悪化
させてんじやねえ！」

ヅカヅカとヒガナに歩み寄り、レツクウザから手を払い除けその胸

倉を掴む。

「手前の旦那が命懸けで救つた命を無駄にすんじゃねえ！……お前は…託された命をなんだと思つてやがる！」

「君に…お前に何がわかるんだ！」

「わかるわけえだろボケエ！」

ザルトヘルの頭突き！

効果は抜群だ！

「おいおいおい」

「死んだわシリアルス」

「俺はな…火災でダチも親も、尊敬する奴も死んだ、俺を庇つてな…」

「…君も、家族を…」

ザルトヘルは頭を抑えて踞るヒガナに手を差し伸べる。

「だからよ、ちつたあ手前の命を考えて動けよ…レツクウザもろとも

自爆特効何ざやめてよお。」

「…でも、そうしないともう巨大隕石が…！」

「私もねー、あのサイズはメガシンカしないと無理だわー」

「ほーん、手頃な隕石食えばメガシンカ出来るのか？」

ヒガナとザルトヘルの会話を横目に落ちていた隕石を見ていたボウシが訪ねる。

レツクウザは静かに頷いた。

「…よし！ ベツちゃーーーーん！！

何かを考えた後、突如懷から取り出したメガホンを構え叫ぶ。

ベツちゃーーーーん！！

ツちゃーーーーん！！…

ちやーーーーん！！…

「ハーア！」

自分が呼ばれたことに気が付いたのか、遙か先からイベルタル飛翔していく。

そしてそのまま空の柱に追突した。

「あつ都會でよくみるやつだこれ」

「いや、ガラス張りじやねえんだから気付けよ」

「あ～腹へつた…んで何かよう？」

バサバサと上昇し頂にやつてくるとボウシはとあるメモをイベルタルに渡す。

「これを大至急ダイゴさんやクヌギダマ博士に見せて必要なブツ持つてきてくれ」

「えー、めんどく「全部片付いたらバイキングすつぞ」よつしゃがんばるぞー」

「…………なにあれ」

「カロスの害鳥だ、気にすんな」

「ええ……」

突然やつて来たイベルタルにヒガナは完全に困惑した。

それから数時間…。

日は傾き、巨大隕石も裸眼で視認できるほど落ちてきていた。

「……ねえ、君のトレーナーがあの鳥に何か頼んでたけど…解決できるのかな」

ザルトヘルは葉巻に火を付け、口に加える。

「さあな、やることをやるだけだよ…あいつは」

「もうだめだ…おしまいだ…死ぬしかない」

「お前は元から死んどるやろが」

「はあ…何でこんな馬鹿たちと死ななきやいけないのよ」

「……ねえ本当に大丈夫!?」

「だだ大丈夫だ、まだあわわわわ」

「おいお前ら! ベツちゃんが戻ってきたぞ!」

「遅れてわるいなー、ブツ重くてよお!」

その背にオダマキ博士を乗せ。

両足で大型のコンテナを吊り下げたイベルタルが飛んできていた。

「ボウシくん! 頼まれていた隕石かき集めてきたよ!」

「サンキユーパッギ」

「オダマキだよ」

レツクウザの目の前にコンテナが置かれ、青団子その戸を開ける。中にはホウエン地方に落ちていたとされる小さな隕石が大量に入っていた。

「やつたぜ」

レツクウザはそう言うなり顔をコンテナに突っ込み中の隕石を食い漁る。

後にヒガナはこう語った

「首をコントナに突っ込んでビツタンビツタンしてゐるの控えめにいつて気持ち悪かつた」……と。

「これだけ食べれば……くくく……見るがいい下等生物どもよ! これが私のメガシンカだあーー!!」

「急に態度でかくなるな」

「さつきまでビツタンビツタンしてた奴がなにいつてるんすかね」

まばゆい光に包まれ、レツクウザの体が徐々に変化していく、今ここにメガレツクウザが降臨したのだ。

「これが……メガレツクウザ……!」

「よし、なんとかなつたなー、んじやキユウリ」

「レツクウザだ」

「ドカーンとあれぶつ壊してくれよ」

ボウシが落下を続ける巨大隕石を指差すとレツクウザは直線系の

姿を取り一気に上昇する。

「いつけーー！」

「やつちまえ！」

そして巨大隕石に激突する。

「食らえ！ガリヨウテンセイ！」

レツクウザは更に勢いを付け、そのまま徐々に隕石を押し返していく。

「たかが石ころひとつメガレツクウザが押し返してやる！」

そして…メガレツクウザが巨大隕石を貫く。

その穴からヒビが広がり、巨大隕石は崩れだした。

「ついでに破片も処理するか…破壊光線！」

「こつちも手伝うぞ！ベツちゃん、デスワイングだ！」

「オエー！」

「絶望的に汚いＳＥやめろ」

「某Ｒ社かよ」

「スマブラ参戦おめでとう…おめでとう…」

「ねえ君ら本当に自由すぎない？」

破片の処理にヒガナも自分のポケモンを出し応戦する。

そして……

「!? e n m i」

「ん？」

レツクウザの背後に奇妙なポケモンが現れる、そのポケモンはレツクウザが振り替えるなりエネルギー弾をレツクウザ放つ。

「うぼおああああああつ！」

「ん？」

「あら？」

「へ？」

「ふあ!?」

「あ” あ?」

「大変だ！キユウリだ！」

「やられたんだ！落ちてくる！」

「親方！空からキユウリが！」

「……ザルトヘル？」

「あいつは……まさかデオキシス!?」

夕焼け空に漂う謎のポケモン、デオキシス。
果たしてボウシ達はどうなるのか！
次回、アルファサファイア編 最終回！

明日を掴むもの

「やつは…デオキシス！ 地球外のポケモンだ！」

不意打ちとはいえレックウザを倒した謎のポケモンをザルトヘルは指を差し、叫ぶ。

「おいおいおい」

「死んだわきゅうり」

デオキシスは落ちてくる無数の破片を暫く眺めた後、ボウシ達の方を向く。

「我らの家をよくも破壊してくれたな…その罪は…貴様らの生命で償つてもらうぞ！」

そう叫ぶなりデオキシスは鋭利な姿…アタックフォルムに姿を変え、胸部にエネルギーを溜める。

〈全てのものは滅びゆく…〉

「つ！ 避けろお前ら！ あれは…あれはまずい！」

「俺が止める！ アームハンツ…!?」

〈それが宇宙絶対の定め！〉

強大なエネルギー弾 それはサイコブースト。

それは受け止めようとした青団子を包込み爆発を起こした。

「あっ…青団子っー！！」

「くそ！ あいつは…！ デオキシスは昔ノモセを焼き払いやがったんだ…あのエネルギー弾で！」

「ノモセの…？ そう…あいつがザル…あなたの…」

「ボウシ！ 奴をはつ倒すぞ！ 青団子はもう戦えねえ、ボールに戻すんだ」

「くつ…悪い…青団子…S I D E N！ お前ならワンチャン攻撃を防げるか！？」

「やれるかわからんねえけど…やるだけやりますよつと！ メガシンカ！」

「こいつ等々ノータイムでメガシンカしおつたよ！」

「こんな状況でもふざけるの君ら？」

「そういう定めよ、諦めなさい」

〈滅べ！滅べ！〉

「げえ!? あいつひたすら撃つてきやがった! S I D E N つ!!」

S
I
D
E
N の 瞠 想 !

うおおおおおつ!! 耐えるぞおおおおおつ!」

SIDE Nには~~は~~たらなかつた！

S I D E N をすり抜けたサイコブーストはその足元……空の柱へと直撃する。

卷之三

卷之三

一
二

「あらら（空を飛ぶ）」

「そんな気はしてた（空を飛ぶ）」

サイエフリストによると、空の柱全体にヒビが入り、徐々に崩れだし

四
七

「勝利！」

「可
以
不
要
？」

「俺に考えがある

「ええ、いいわよ」

滅べ！

デオキシスは手当たり次第にサイコブーストを空の柱へ発射し続けている。

ボウシとSIDEN等はまとめてイベルタルへ、ザルトヘルはおやこドンに掘まり、ヒガナはボーマンダに乗つて崩れ行く空の柱から飛び立つ

「ボウシ！俺がケリを付けてくる！後は……任せたぞ！」

「ザルニキ!? まずいですよ!?

一大丈夫だS.I.D.E.N！あいつは…氣付いてるみたいだな」
デオキシスへ向かい羽ばたくおやこドン

それに掴まるザルトヘルの背中をボウシ達は静かに見ていた

「たつた二匹とは笑止！」

先程とは異なり破壊光線をおやこドンに放つデオキシス。おやこドンはザルトヘルを放り投げてそれを回避した。

「残念だつたな…俺とお前の…」

放り投げられた勢いで、デオキシスの頭上を取るザルトヘル。

「タイマンだ！」

ザルトヘルの辻斬り！

両爪に力を込め、勢いよく振り下ろすザルトヘル。迎え撃つかの様にデオキシスもサイコブーストを放つ

「なら…貴様が滅ぶまでのこと！」

ザルトヘルの爪とサイコブーストがぶつかり合う

勝った

デオキシスはそう確信したのだろう。

しかし

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄あつ！」

両爪を交互に振り下ろしサイコブーストを押し返すザルトヘルの姿がそこにはあつた。

「何故？何故？」

「はっ！知らねーみたいだから教えてやるよ！」

「あなたの敗因はたつたひとつ！」

「そう、とてもシンプルで…この星ならごく当たり前なこと！」

「悪に！エスペーは無効！」

「そういうことだがああああつッ！」

ザルトヘルの辻斬り！

更に辻斬り！

更に辻斬り！

「うぐぬおおおおおおつつ!? 我の核が! このような奴にいいい!?」

ザルトヘルの辻斬り! 辻斬り! 辻斬り! 辻斬り!

「これで…終いだあ!」

ザルトヘルの辻斬り!

急所に当たつた!

効果は抜群だ!

「我が…滅びる…なら!」

「な”つ?」

核を碎かれ力なく落ちていくデオキシスは最後の力を振り絞つて触手を伸ばし、ザルトヘルを絡めとる。

「貴様もこの海で散れえ!」

「まよい! ザルニキは泳げないんだ!」

「この為にミドラーを連れてきたんだ! 頼んだぞミドラー!」

「任せろ!」

「ボーマンダ! 私達も助けにいくよ…何だかんだで助けられちやつたしね!」

「…ああ、いいとも」

意識が遠退く。

触手ををほどこうともがくほど沈んでいき、既に海面は遙か遠くに感じるほど離れている。

ただ…少しだけあいつらの…ノモセの仲間の仇は……とれ…

「人に説教しておいて…死ぬなんて許さないよ
「そうだぜザル!」

暗い海から光指す海面へ引き上げられる。

眩む視界には自分を引っ張ってきたであろう人物が映る。

「ヒガナ……？それにミドラーか……？ そういうやお前もいたな…」

「ひつでえww」

「はいはい、ヒガナさんがわざわざ助けてあげましたよ…まったく」

「おーーーい!!」

「ザルニキイイ！」

声のする方を見上げるとボウシやS I D E N 達がイベルタルに乗つてこちらへやってきていた。

「たく……まだくたばれねえか！」

悪タイプだらけのポケモン——アルファサファイア—— 編
おわり……？

悪だらクロニクル

ようこそ！喫茶ボウシ屋へ！

トクサネシティ郊外。

そこには一件の喫茶店があると人気SNS「ポケスタグラム」「ロケッター」等で噂として流れていた。

なぜ噂なのか、それは外観があまりにも喫茶店らしからぬ廃墟でありよく柄の悪そうなポケモンが彷徨いているからだ。

”本当に喫茶店がやっているならここまで荒れた環境じやないでしょ”

誰もがそう、言うものだからその喫茶店は噂…半ば都市伝説と化していただ……。

「いやあー、客こないっすねえ」

アローラからこのホウエンの視察に訪れて数日。

そんな僕がトクサネシティを観光しているとそんなことをぼやいているヤミラミを見かけた。

ふと、観光客向けの店で働いている可能性がよぎり、そのヤミラミを呼び止めた。

「いやー、遠いところから来たんすねえ…うちの店は喫茶店なんすけどね、どーーーもー客が来ないと来たもんでいやあ良かつた良かつた」

自分の前を歩くヤミラミ…名をSIDENと言う。

恐らく彼のトレーナーが経営している店でSIDENは客引きの為にトクサネシティをうろうろしていたのだろう。

「お？何すか？もしかして怪しい店だと疑つてますんなあことはこのSIDENの命に掛けてもないって誓いますよお！」

いや、ヤミラミは命ないだろ

「あつ、そつかあ…つて着きましたよ」

辿り着いたのは看板すらない廃墟

しかしよく目を凝らすとガラスの向こう側の店内はしっかりと整えられていた。

「うち、不器用なのばかりだから外観が綺麗にできないんすよねえ：だからかなあ」

うん、少なくとも看板すらない喫茶店の時点で客は来ないだろうね。

カラソコロソとドアベルの変わりに置かれていた風鈴が鳴り、店のドアが開かれる。

ドアを開けたのは黒いメガネを掛け、口に葉巻を咥えたドラピオン。

「あつ！ ザルニキまた店の中で吸つたんすか!?」

「まだ吸つてねえよ！ ヒガナやカルロがうるせえからこうして外につて…客かい」

成る程、恐らくこのドラピオンもSIDENくんのトレーナーの手持ちなのだろう。

いやまあ葉巻を吸うドラピオンとか滅多にいないけど。

「ふーん、まあゆつくりしていつてくれ客さん」

それだけ言うとドラピオンはどこからかヒトモシを取り出し、葉巻に火を着けながらどこかへ歩き去つていった。

いや、ヒトモシの使い方どうなんだいそれ。

店内に踏みいると中はかなり綺麗に掃除されており、以下にもといつた喫茶店であった。

「いらっしゃいませー」

声のする方を向くとエプロンを掛けた褐色の女性がテーブル拭いていた。

彼女がSIDEN君たちのトレーナーか。

「あれはうちのバイトっすよ、色々やらかしてとんでもねえ借金抱えたもんで住み込みで働いてましてねえ…」

そう言いながらSIDENくんに誘われ椅子へ座る。

さて、外観とドラピオンがあれな位は今のところ普通の喫茶店だ。

次に気になるのは…

「いやあ久し振りのお客さんだねえ、メニューはこちらですよっと」

先程の女性がメニューを差し出してくる。

ラミネート加工されただけのシンプルなメニューだった。

・シェフの気まぐれシーフード

・木の実サラダ

・ペペロンチーノ

・マグマ団風爆発オムライス

・ペロリームケーキEX

・飲み物各種――

うん、うん？まあ普通なのかな、少なくとも爆発オムライスという物騒な料理があるが。

とりあえずエネココアのアイスを頼み、再び店内を見回す。

ふと、壁を見ると何枚かの写真が貼つてあった。

「あつ、お客さん気になります？それはですね……」

「俺達の足跡…まあ思い出つすね」

成る程、結構状況が謎の写真が多いけどここに至るまでに何か？
「うーん、だつたら折角なんでエネココアのおまけにちょっととした冒
険譚でも話しますかね」

それは、遠きカロスの地で起きた

命を奪う存在と、命をつくる存在の話

エピソード カロス

エピソードカロス I 始まりの日

カロス地方

砂漠や雪山、森といった豊かな自然のある地方。

「いっかー！俺のトムノカチデツスピートル！」
「うおおおおつさせねえ！罠発動！聖なるバリア・ミラフオース！底
知れぬ絶望の淵へしづめえ！」

自室にて謎のTCGを遊ぶ二つの影。

その正体はハット帽を被つた人間のガキ、ボウシと彼のポケモン
ヤミラミのSIDE Nだ。

「あっ、喉乾いたから水とつてこ——」

楽しく遊びを興じる一人と一匹の部屋の扉が突如して蹴り開けら
れる

ドアが蹴り開けられたことで水を取りに行こうとしてたSIDE
Nは吹き飛ばされたので天井にめり込み、ジタバタと暴れている。

「ゲエ！セレナ！」

「ゲエ！つてなによ！可愛い隣人が来てやつたのに！」

「可愛い女は可愛さをアピールしないって」

「アブ、殺れ！」

「わんわんお！（噛みつく）」

セレナのアブソルの噛みつく！

急所に当たつた！

「だからよお…止まるんじやねえぞ……」キボオノハナー

「して、なにようだ月光ワンキル女」

「お前ライオダンサーでボコるわ……ほら、今日でしょ博士の助手と
会うのつて」

「…………ほにゅ？」

「んーーー！アブ！殺れ！」

「バカガード！」

「ファツ!?」

襲い掛かるアブソルから避けるためにSIDENを盾にしつつ準備をするボウシ

「まー、俺SIDEN居るし、カルロもミドラもいつから適当に挨拶済ませたら行くわ」

「適当にも程があるでしょ、と言うかあなたの手持ち癖が強いのよ！」「うるせえぞ！アブソル単騎でハクダン突破してるくせによ！いくぞSIDEN!!」

そう叫ぶとボウシは窓を突き破り外へと飛び出した

「すべて壊すんだ！」

「おふくろさんには後でメールしとくか」

「なんなの……あの人たち……」

「なあなあSIDEN」

「ん？」

「俺ハクダンしか行つたことねえからその後どうしよ」「ええ……」

「これが俺の旅が始まった日ですね」

そう語るSIDENくんを見ながら僕はエネココアを飲み干していることに気が付いた。

正直……論理や秩序が微塵も感じられないこの話に僕の中の少年心が疼いてしまっていた。

「ねえ…エネココアのおかわりと…話の続きをお願ひできるかな?」

SIDENくんはニイと笑うと「エネココア追加ー！」と高らかに厨房に叫んだ。

あつ、ナイフ飛んできて刺さった、可哀想。